

国光の二ツ塚

—新潟県柏崎市・国光の二ツ塚発掘調査報告書—

1999

柏崎市教育委員会

国光の二ツ塚

—新潟県柏崎市・国光の二ツ塚発掘調査報告書—

1999

柏崎市教育委員会

序

柏崎市の東部に位置する北条地区は、戦国時代に北条城の城下町として栄えた地域です。北条城の麓に立つ町並には古い寺院も多くみられ、中世の面影を今日に伝えています。また、江戸時代には魚沼街道として整備された、柏崎と小千谷を結ぶ道がこの地を通過することから、交通の要衝でもありました。さらに、城下町を取り囲む丘陵には、非常に多くの塚が分布していることも知られています。特に、国光の塚群（北条）、夏渡の百塚（長鳥）では本格的な発掘調査が実施されており、これまでに多くの成果を得てきました。ここに報告する国光の二ツ塚もそのひとつで、北条地区の歴史を探るにはとても貴重な遺跡といえます。

国光の二ツ塚は、市道柏崎22-18号線道路改良工事に先立って発掘調査を実施した遺跡です。調査区が尾根の先端部ということもあって、足場は不安定であり、作業にはたいへんな危険が伴いました。また、調査期間中には台風や大雨によって幾度となく調査の進行が危ぶまれましたが、時折訪れる晴天によって、調査を進めていくことができました。調査面積はとても小さく、2基の塚と木炭窯などを発掘したにすぎません。しかし、私たちの祖先の歴史を復元していく上では、いずれも極めて貴重な資料となります。調査の成果を報告する本書によって、遺跡を身近に感じていただき、遺跡の保護に対する認識を深めていただければ、幸い드립니다。

最後に、事業主体者（施工責任者）でもあります柏崎市建設部道路河川課には多くのご協力をいただきました。また、尾根の上という危険な現場における調査に参加されました柏崎市シルバー人材センターの会員の皆様および調査員各位、そして本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成11年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例 言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字北条字国光2487-1番地に所在する、国光の二ツ塚発掘調査の記録である。
2. 本事業は、市道柏崎22-18号線道路改良工事に伴い、柏崎市建設部道路河川課から委託を受け、柏崎市教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査は、平成10年9月24日から同年10月22日まで現場作業を実施し、その後平成11年3月31まで整理作業および報告書作成作業を行った。現場作業は、社団法人柏崎市シルバーハウスセンターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西木町3丁目喬柏園内文化振興課遺跡調査室において行った。また現場作業は、文化振興課職員および遺跡調査室のスタッフを調査員・調査補助員とし、整理・報告書作成作業は、職員（芸能員）を中心、遺跡調査室のスタッフで行った。
4. 発掘調査によって出土した遺物は、注記に際して遺跡名を「国光二」略し、グリッド名や構造名および層序等を併記した。
5. 本事業で出土した遺物ならびに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（文化振興課遺跡調査室）が保管・管理している。
6. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、調査担当の伊藤が編集もあわせて行った。

第I章・第II章第1節・第III章・第V章……………平吹 靖

第II章第2節・第IV章・第VI章……………伊藤啓雄

7. 本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

8. 発掘調査から本書作成までには、事業主体者（施工責任者）である柏崎市建設部道路河川課から数多くのご理解とご協力を賜った。さらに、このほかにも多大なご助力ならびにご理解等をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

笠井吉正・中野 純

柏崎市教育委員会総務課・柏崎市立北条中学校・柏崎市立図書館・株式会社セビアス

（顛不同・敬称略）

調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一

総括 小林清祐（文化振興課長）

管理・庶務 飯塚純一（文化振興課副参事兼理藏文化財係長事務取扱）

調査指導 岩田高志（文化振興課副参事兼理藏文化財係主査学芸員事務取扱）

調査担当 伊藤啓雄（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

調査員 平吹 靖（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

横田忠義（文化振興課埋蔵文化財係工務員）

渡辺富夫（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

帆刈敏子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

徳間香代子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

村山幸子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

調査補助員 黒崎和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

竹井 一（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

現場作業スタッフ

大橋 勇・大矢 畏・飼形武雄・中沢時春・野村 直・本間正敏

（柏崎市シルバーハウスセンター会員：五十音順）

整理作業スタッフ

大野博子・片山和子・萩野しげ子・吉浦啓子

（遺跡調査室：五十音順）

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 遺跡の位置と地理的環境	/2
2 国光の二ツ塚をめぐる歴史的環境	/4
III 調査の概要	8
1 調査の方法とグリッドの設定	/8
2 発掘調査の経過	/8
IV 遺跡と遺構	10
1 塚の立地と現状	/10
2 基本層序	/10
3 塚の概要	/11
4 木炭窯の概要	/14
V 出土遺物	15
1 楠文時代の遺物	/15
2 その他の時代の遺物	/15
VI 総括	16
1 長島川流域における塚(群)	/16
2 国光の二ツ塚の検討	/16
3 まとめにかえて	/20
引用参考文献	22
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 柏崎平野の地形分類図と 国光の二ツ塚の位置	/3
第2図 長島川流域における遺跡分布図	/5
第3図 国光の二ツ塚基本層序柱状模式図	/11
第4図 長島川流域における塚(群)分布図	/17
第5図 国光尾根における塚群の位置模式図	/19
第6図 国光の塚群第7~11号塚全測図	/19
第7図 国光の塚群第9~11号塚基底部平面図	/19
第8図 国光の塚群第9~11号塚断面図	/19
第9図 国光の二ツ塚平・断面略図	/21
第10図 国光の二ツ塚と主要な旧道の位置図	/21

挿表目次

第1表 近世北条における村の石高・戸数集計表	/7
------------------------	----

図版目次

図面

- 図版1 国光の二ツ塚と周辺地形 1:10,000
図版2 国光の二ツ塚発掘調査区とグリッドの配置図 1:250
図版3 国光の二ツ塚全測図 1:150
図版4 国光の二ツ塚遺構全体図 1:80
図版5 国光の二ツ塚基底部と盛土 1:80
図版6 国光の二ツ塚第1号塚断面図 1:50
図版7 国光の二ツ塚第2号塚断面図 1:50
図版8 国光の二ツ塚S X-3・国光の二ツ塚出土遺物実測図 1:60・1:3

写真

- 図版9 遺跡1 国光の二ツ塚周辺の航空写真(1961年)約1:15,000
図版10 遺跡2 a. 遺跡遠景(南東八石山頂から) b. 遺跡遠景(南西から)
図版11 遺跡3 a. 遺跡遠景(北西から) b. 遺跡遠景(北から)
c. 遺跡遠景(南東から)
図版12 遺跡4 a. 遺跡近景(南西から) b. 塚発見状況(東から)
図版13 調査1 a. 雜木刈払作業(北東から) b. 測量作業(東から)
c. 発掘着手段階(北から) d. 表土剥ぎ作業(北から)
e. 盛土発掘作業(南西から) f. S X-3 発掘作業(東から)
g. ベルト除去作業(北東から) h. 全体清掃作業(南西から)
図版14 調査2 a. 遺構確認(東から) b. 遺構確認(南西から)
図版15 調査3 a. 遺構完掘(北東から) b. 遺構完掘(南西から)
図版16 第1号塚1 a. 発掘着手前(発見状況)(東から) b. 発掘着手前(雑木刈払後)(南から)
図版17 第1号塚2 a. 盛土状況(南東から) b. 盛土状況(南から)
図版18 第1号塚3 a. 南北土層断面(南東から) b. 東西土層断面(南西から)
図版19 第1号塚4 a. 土層と基底部(南から) c. 東ベルト(南西から)
b. 西・南ベルト(南西から) e. 周溝土層断面(北から)
d. 北ベルト(東から) b. 基底部(南から)
図版20 第1号塚5 a. 基底部(南東から) b. 発掘着手前(雑木刈払後)(南から)
図版21 第2号塚1 a. 発掘着手前(発見状況)(東から) b. 盛土状況(東から)
図版22 第2号塚2 a. 盛土状況(南東から) b. 東西土層断面(南西から)
図版23 第2号塚3 a. 南北土層断面(南東から) c. 東ベルト(南から)
図版24 第2号塚4 a. 土層と基底部(南から) e. 周溝土層断面(南東から)
b. 南ベルト(東から) b. 基底部(東から)
d. 周溝土層断面(南東から) b. S X-3 南北土層断面(2)(南西から)
図版25 第2号塚5 a. 基底部(南東から) d. S X-3 完掘(西から)
図版26 その他の遺構 f. L-10⑤グリッド層序(南西から)
と基本層序 c. S X-3 東西土層断面(南から) h. M-11④グリッド層序(北西から)
e. 小釋集中区域(南西から) g. M-10⑦グリッド層序(北東から)
f. 出土遺物(約1:2)
g. M-11④グリッド層序(北西から)
図版27 眺望・遺物 a. 国光より米山を望む(東から)
図版28 調査スタッフ a. 調査区と作業風景(南西から) b. 調査スタッフ

I 調査に至る経緯

国光の二ツ塚は、柏崎市中心部から約9kmの距離を隔てた、柏崎市大字北条字国光2487-1番地に所在する。地形的には、鰐石川の支流である長島川中流域左岸に立地し、八石山塊から緩やかに伸びる尾根の先端部に位置する。尾根の先端まで続く背部分は概して平坦であるが、先端および両側斜面は急傾度に傾斜して沖積地に接している。当該地の現況は山林で占められ、標高は20~30mであり、2基の塚が立地する尾根筋先端部分は26~27mとなる。

当該地周辺の長島川流域においては、単独で存在する単独塚や夏渡の百塚に代表される2基以上の塚で構成される塚群が周知のものとして多数確認されており、市内でも特に分布が顯著な地区である。分布の特徴としては、そのほとんどが、尾根上の僅かな平坦部に築造されている。特に尾根線に沿った立地のものが多く、形態的には複数のものが集まる群集形態を示すものが多い。本遺跡が発見される以前の昭和57年には、隣接する国光の塚群の調査が、東京電力柏崎刈羽原子力発電所建設に係る、送電線鉄塔設置に伴い実施されている〔柏崎市教委1983〕。調査結果としては、塚内部から遺物等が出土しなかったものの、塚の形態や築造工程を明らかにすることができた。またその一方で、おもに縄文時代中期前葉の土器等が黒褐色旧表土内から出土している。

今回の調査は、市道柏崎22-18号線改良工事に伴う事前の発掘調査である。平成8年度に事業用地南側で発掘調査が実施されていたが（音無瀬遺跡）、着手段階では国光の二ツ塚はまだ発見されてはいなかった。塚の存在が明らかとなったのは、音無瀬遺跡発掘調査中の平成8年11月14日に、同じ事業用地内である国光の尾根を現地踏査したことによる。尾根の先端部分に、高さ1mほどの小さなマウンドが2基並んで発見された。このマウンドは塚と判断され、それを北から第1号塚・第2号塚とし、「国光の二ツ塚」と呼称されるに至った。2基の塚は即座に新潟県教育委員会に埋蔵文化財包蔵地として通知され、文化財保護法第57条の4第1項に基づき周知化されることとなった。塚の立地部分は市道事業用地内に存在し、工法上掘削が伴う部分である。工事は当初の予定通り進められており、すでに法線変更が不可能な状況であったため、工事が当該地に及ぶ前に発掘調査を実施することとなった。

平成9年7月2日付け道第69号（第1号塚）・70号（第2号塚）により、事業主体者である柏崎市長から、文化財保護法第57条の3の規定に基づく土木工事等の通知がなされたため、市教委は平成9年7月14日付け教文第1065号の2（第1号塚）、および教文第1066号の2（第2号塚）で県教委へ進達した。その後、県教育長から平成9年7月16日付け教文第457号の2、および教文第458号の2で、それぞれ発掘調査を実施する旨の通知があり、スケジュールとしては平成10年9月頃の実施を予定した。

また、塚の立地部分が前述のような急斜面にかかることから、発掘調査の開始にあたっては作業の安全を図るために足場を確保することが必要であった。このほか雑木の刈払いや、廃土の流出防止のための柵を設けるといった諸準備を行ったが、悪天候が影響したために、準備が整ったのは9月中旬となった。その後9月24日に発掘調査に着手し、同日付教文第42号の2（第1号塚）、および第43号の2（第2号塚）により県教育長および文化庁長官に文化財保護法第98条の1第2項に基づく報告をした。調査は現況の地形測量から開始したので、実際に発掘作業を実施したのは9月30日となった。

II 遺跡の位置と環境

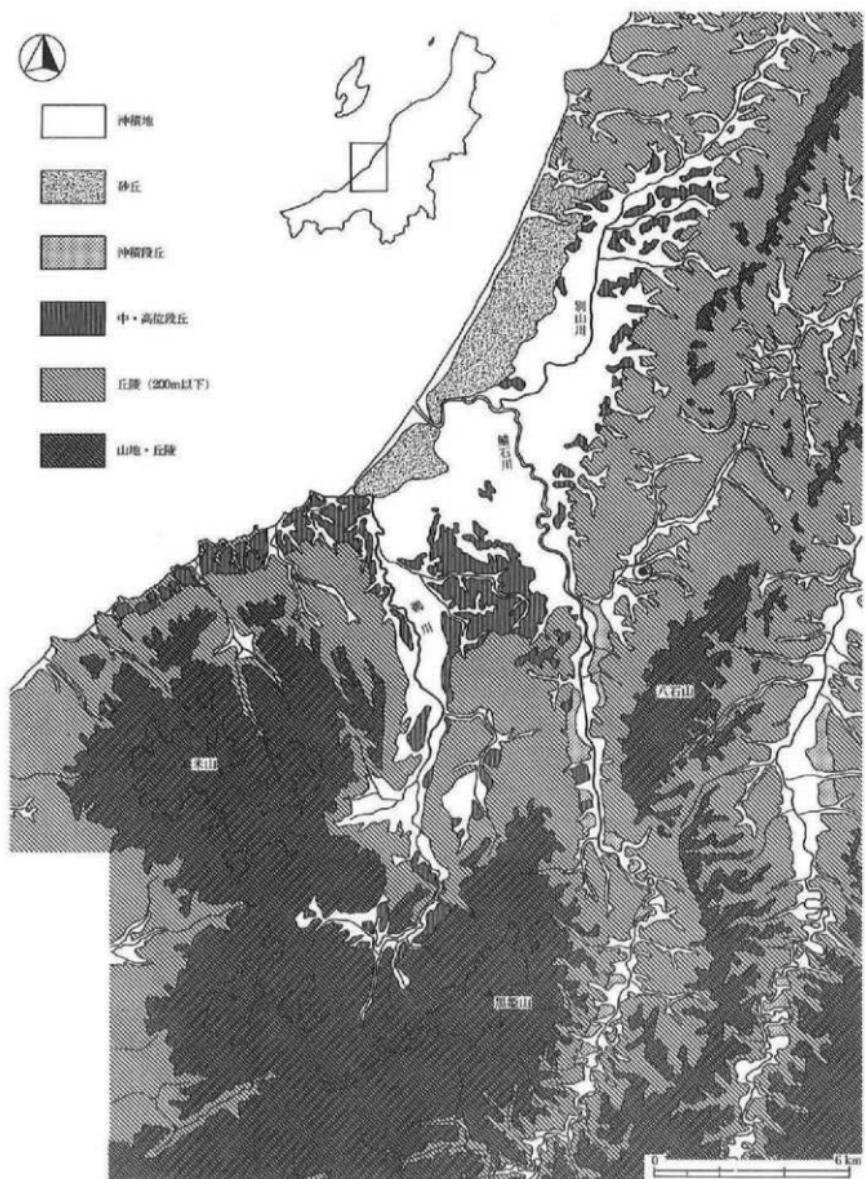
1 遺跡の位置と地理的環境

柏崎平野概観 柏崎市は、新潟県のはば中央に位置する人口9万人ほどの小都市であり、行政的な地域区分では中越地方に属している。新潟県は上・中・下越地方に3区分されており、北側に位置する下越は、信濃川と阿賀野川の二大河川に形成された広大な新潟平野を有し、南側に位置する上越地方は、北方に関川と保倉川の形成する高田平野が広がり、南方に北アルプスを控えている。その間に位置する中越は、魚沼山地を主体とする南部と信濃川中流域から柏崎平野を含む北部とに大きく区分され、さらに柏崎平野は、北部でも西半部に位置している。

柏崎平野は、鶴川と鰐石川を主要河川として形成されたひとつの独立した臨海沖積平野である。この二大河川は個々に大小の支流をもつ独立した水系を有し、沖積平野を形成している。柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊は、南方から連なる東頸城丘陵の一部であり、この丘陵地形は北流する鶴川・鰐石川によって米山・黒姫山・八石山の刈羽三山をそれぞれの頂点とした西部・中央部・東部に3区分される。西部は米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、その広がりは、低位・中位・高位と各段丘の形成が顕著な海岸まで続く。米山は現在でも隆起を続けるといわれており、際立って傾斜の強い地形的景観となっている。平野部をなす冲積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、鶴川・鰐石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には中位段丘を形成するとともに、その北側には冲積地が広がっている。東部は、北東方向の背斜軸に沿って西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長島川といった鰐石川の支流が南東に流れる。沖積平野部の北西面は海岸線に沿って柏崎砂丘・荒浜砂丘が伸びており、荒浜砂丘は砂層の堆積を増しながら北上し、北側丘陵部に接している。

今回調査された国光の二ツ塚は、地形区分で言えば柏崎平野の東部に位置し、鰐石川の中流域で合流する長島川流域に存在する瘦せ尾根先端に立地している。

長島川流域と国光の二ツ塚 国光の二ツ塚は、鰐石川と長島川の合流点近くの東側に位置する。長島川流域の地形は、河川に沿った比較的狭い冲積地を、南西方向に向かって約8kmの長さで形成している。合流点付近の標高は15m程度、上流部では60m程度と標高差が著しい。塚の立地する尾根の標高は約30mであり、その直下の冲積地はおよそ標高20mを計る。この付近の長島川には、八石山塊から流れ出る多くの小河川が集中し、丘陵地には幾つもの沢が形成されている。2基の塚は、この沢と沢の間に挟まれて舌状に伸びる尾根先端部に立地する。位置的には、尾根筋から若干ずれた西側の緩斜面縁辺に、近接して築造されている。この尾根からは間近に八石山、遠くに米山・黒姫山と刈羽三山と称する山々を一望でき、周辺に存在する多くの尾根の中でも、特に景観の優れた立地条件といえる。交通の面からみると、この尾根付近で街道が三叉状に分岐・合流し、交通の要所からもよく見渡せる位置にある。当該地は現在、道路によって国光の塚群が立地する標高70m程度の尾根と分断されているが、本来の地形では同じ尾根上に立地するものである。



第1図 柏崎平野の地形分類と国光の二ツ塚の位置

2 国光の二ツ塚をめぐる歴史的環境

国光の二ツ塚からは、塚に関連する遺物は出土しなかったため、その築造された年代については明確にすることはできない。しかし、周辺で確認される塚（群）が、おおむね中世後期～近世前期の所産であると推定されていることから【品田1992】、この塚の造営年代についてもその範疇にあるものと考えられる。また今回の調査では、塚には直接関わりがないものの、縄文・古代の遺物が出土している。

そこで本節では、国光の二ツ塚が所在する長島川流域について、これら各時期における歴史的環境を述べることとする。

縄文時代 長島川流域で確認できる縄文時代の遺跡としては、夏渡谷地遺跡・夏渡の百塚遺跡・五分一遺跡・国光の塚群遺跡・池ノ端遺跡・引地A遺跡が知られている。このほかに、越路町境に近い山間部には倉下遺跡が所在する。倉下遺跡から出土した遺物のうち、現存しているのは疊核石器1点のみであり、時期の特定は困難であるが、旧石器時代に遡る可能性も指摘される資料である【品田1987】。

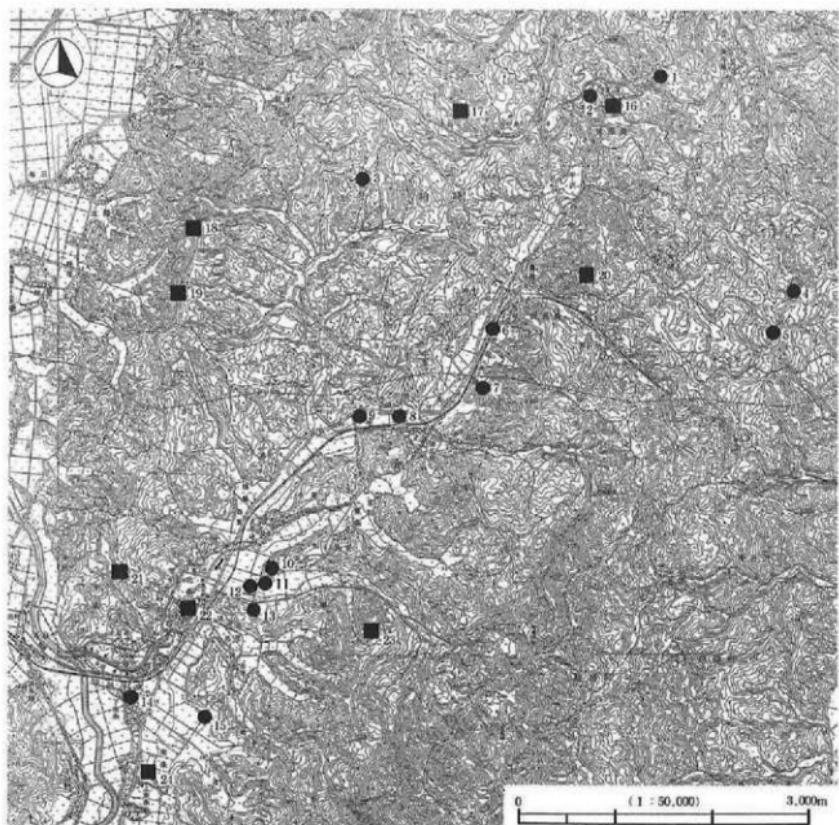
夏渡谷地遺跡で発見された1個体の土器は、文様の特徴などから早期後半に位置づけられる。現段階では市内最古の土器であり、時期不詳の倉下遺跡を除けば、長島川流域における最古の遺跡と考えられる。早期後半は、その前後に比して遺跡数の少ない時期であるが、北東約6.5kmの丘陵には七軒町遺跡（長岡市）が所在するなど【七軒町遺跡等発掘調査会1978】、柏崎平野の東部丘陵は今後注目すべき区域である【品田1988】。また前期以降では、尾根上の塚群の発掘に伴って、夏渡の百塚【柏崎市教委1989】からは前期後半、国光の塚群【柏崎市教委1983】からは中期前葉に比定される新崎式土器が発見されているが、今回の国光の二ツ塚においても前期後半と推定される土器片が出土している。このほか、丘陵上における五分一遺跡【宇佐美・高橋1987】からは中期初頭に位置付けられる剣野E式土器が、河岸段丘上の引地A遺跡【宇佐美・山本1987】からは後～晚期に比定される独鉛石や磨製石斧が採集されている。

当該地におけるこれら縄文時代の遺跡において、確認されているのは遺物のみであり、遺構の検出は得られていないため、縄文集落の様相を把握するには、資料の増加を待たねばならない。また他地域に比べると、縄文時代の遺跡数は少なく、遺物の出土量もわずかである。これは、長島川が小規模な河川で、河岸段丘の発達も顕著ではないことも一因であったと思われる。

弥生～古墳時代 本格的な農耕社会が始まると、北西側の曾地丘陵で隔てられている吉井地区では弥生中期以降の遺跡が増加するのにに対し、当該地ではかなり希薄である。引地A遺跡より弥生土器が出土したとされるのみであり、時期等も不明である【宇佐美・山本1987】。

続く古墳時代になっても、同様に遺跡の内容は希薄であるが、鰐石川との合流点に近い龜の倉遺跡では、前～中期および後期の土器が採集されている。前～中期の遺物としては、二重口縁壺や赤彩された壺・高杯が、後期には内面を黒色処理した高杯や土製支脚がある【宇佐美・坂井1987】。遺物の内容からは、ある程度の時間幅を有した集落跡が想定される。

古代 7世紀の畿内政権によって、当該地にも律令に基づく制度が導入されたと考えられる。7世紀末までには北陸道にあたる越国が3分割され、阿賀野川以南の新潟県域は越中国に属していた。その後、8世紀初頭に越中国4郡割譲や出羽郡建郡・出羽国建置を経て、明治に至る後援國が確定したと考えられている。なお柏崎地方は、割譲された4郡中の古志郡に属していたが、9世紀初頭に三嶋郡として分離独立したと推定される【米沢1980】。さらに、承平年間（931～937）に成立した『和名類聚抄』には、三嶋



No.	名 称	時 期	No.	名 称	時 期	No.	名 称	時 期
1	夏渡の百坂道跡	縄文前期後半	9	引地B遺跡	中世	17	吉井墨川城跡	中世
2	夏渡・谷地道跡	縄文早期末～前期初頭	10	国光の坂群道跡	縄文中期前葉	18	山瀬城跡	中世
3	五分一遺跡	縄文中期初期	11	國光の二ツ坂遺跡	縄文前期後半	19	八方口城跡	中世
4	池ノ端遺跡	縄文後期	12	音無瀬遺跡	古代・中世	20	鳥谷城跡	中世
5	倉下遺跡	縄文時代前半以前	13	諸八遺跡	古代～中世	21	北条城跡	中世
6	岳ノ下遺跡	古代・中世	14	馬場・天神様遺跡	中世	22	北条館跡	中世
7	老崎遺跡	中世・近世	15	龜の倉遺跡	古墳・古代	23	深沢城跡	中世
8	引地A遺跡	縄文後期～晚期・弥生	16	夏渡鉛跡	中世	24	南条館跡	中世

※ 塚を除く

第2図 長島川流域における遺跡分布図

(島) 郡内の郷として三嶋(島)・高家・多岐の3郷が記載されている〔柏崎市史編さん委1987所収4・5〕。この3郷の範囲については、推測の域を出ることができないが、おおよその範囲でとらえるとすれば、鯖石川中流域・長鳥川流域は高家郷域の比定地とすることができる。また、古代北陸道のルートについては、より確実にさせうる資料が集積されつつある。『延喜式』に記載されている佐味・三嶋・多太・大家の各駅で結ばれるルートによって、北陸道は柏崎地方を通過すると考えられているが〔柏崎市史編さん委1987所収13〕、鶴川や鯖石川の渡河点などの差異によって諸説が呈示されている〔新沢1970・金子1990〕。柏崎におけるルートについては、近年の調査成果に基づいた再検討が必要であろう。

当該地における古代遺跡としては、岳ノ下遺跡・音無瀬遺跡・清八遺跡・亀の倉遺跡があげられる。平成8年度に発掘調査された音無瀬遺跡では、墨書きされた須恵器杯や匂描きされた土師器碗を施釉した溝が検出され、何らかの儀礼に関連した場であったことが示唆された。また亀の倉遺跡でも大量の須恵器・土師器が出土している〔宇佐美・坂井1987〕。このほか、岳ノ下遺跡・清八遺跡〔宇佐美・田中1987a〕でもわずかに須恵器片が採集されている。

中世 11世紀後半～12世紀になると、越後国にも多くの荘園が成立するようになり、柏崎地方では宇河・佐橋・比角の3荘が立荘した。このうち皇室領佐橋荘は、「永鳥条」といった記載があることから、鯖石川中流域と長鳥川流域に荘域が想定されており、当該地も佐橋荘に属していたと考えられる。史料上の初見は文治2(1186)年であるが〔柏崎市史編さん委1987所収15〕、12世紀前半には立荘していたとされる〔荻野1986〕。その後の荘園領主には若干の変遷があったようであるが〔村山1990〕、地頭職は鎌倉期を通じて毛利氏が相承していたようである。まず、13世紀初頭に大江氏が佐橋荘の地頭職を得〔田村1987〕、中頃には庶流の越後毛利氏が相伝して在地に赴任していたと思われる〔村山1990〕。さらに毛利氏は北条毛利氏を嫡流として庶流の南条毛利氏・安田毛利氏が分立するが、その後は各々が独自に所領支配を進めていくこととなる。

以後、当該地を支配したのは嫡流である北条氏であり、長鳥川右岸に構えられた北条城は、北条氏の要害である。城内には寺院が多く立ち並び、現在でも中世末の景観を残している。また周辺の丘陵にも、吉井黒川城跡・山淵城跡・八方口城跡・鳥谷城跡・深沢城跡などの山城が所在している。さらに、16世紀には、関東から魚沼を通過して府中に至る通行の記録があるが、塩沢一小千谷一北条一柏崎というルートを経ていることからは、近世の魚沼街道の原形ができていたことをうかがわせる〔小松ほか1994〕。

集落跡などの中世遺跡は、おもに冲積地で確認されているが、特に鯖石川との合流点に立地する馬場・天神腰遺跡は特筆すべきである。平成3～4年の発掘調査により、同遺跡は13～14世紀を主体時期しながらも、12～16世紀の約400年にわたって営まれていたことがわかった。南条毛利氏所縁の地であり、検出された遺構・遺物からは、中世の一般集落とは異なる様相がみられ、都市的な性格が推測されている〔品田1993〕。また音無瀬遺跡の確認調査では、古代の遺物とともに14世紀の珠洲焼や中世土師器皿が出土している〔柏崎市教委1996〕。このほか、引地B遺跡〔宇佐美・田中1987b〕・岳ノ下遺跡・老崎遺跡からも中世の遺物が採集されているが、詳細は不明である。

16世紀の史料に「米山より奥」(「貴屋家兼壳券案」〔柏崎市史編さん委1987所収242〕)・「うかハ(鶴川)よりこなた」(『余目氏旧記』)といった表現があるように、中世では府中を中心とした頸城郡とそれより北の奥郡とが、米山やその裾野を流れる鶴川をもって境界とされていたことが指摘できる。当該地を含む柏崎地方は、奥郡でも頸城郡に近接する位置にある。その地域的な役割の変遷については、今後の課題であろう。

村名		今熊	兼則	鹿嶋	赤尾	荒川	上光安	下光安	深沢	十日町	家則	町方	家近	合計
石高	正保	80	45	97	110	45	160		147	65	60	(437)	81	1327
	寛文	149		130	179	47			180	98		719		
	天和	151	68	108	136	57	72	155	170	107	90	821		1935
戸数	河	24	12	14	40	13	18	19	41	17	20	95		313

※ 石高において、「正保」は「正保後国繪図」(1646年)、「寛文」は寛文検地帳(1685年)、「天和」は天和検地帳(1683年)をもとにしたことを示す。石高は1石未満を切り捨てた数値を記載した。
 ※ 戸数は「白川風土記」をもとに記載した。

第1表 近世北条における村の石高・戸数集計表

近世 13世紀以後、長島川流域はおもに毛利氏(北条氏)の支配を受けてきたが、16世紀後半の御館の乱で敗れた後、柏崎一帯は上杉景勝の家臣によって支配される。しかし、16世紀末に景勝が会津へ移封されてからは、18世紀初頭に至るまでの支配者には幾度かの変遷がみられる。ほとんど高田地方の領主(藩主)による支配が続いたが、ほどなく改易・転封などを受けるといった例が多かったからである。18世紀初頭に松平越中守家が高田藩主となると、その後は白河・桑名への移封があったものの、当該地の支配はそのまま維持されたので、松平家の支配は幕末にまで及んだ。

近世の集落の様子は、現存する検地帳などに記載された石高や19世紀初頭に藩主松平定信の命で編纂された『白川風土記』〔柏崎市立図書館1977〕などをもとにしてうかがい知ることができる。第1表は、近世の北条における村の石高と戸数を示したものである。石高は、「正保国繪図」(1645年)^②および寛文・天和の検地帳(1665・83年)〔柏崎市史編さん委1984a・b〕に記載されている数値である。天領時代に作成された天和検地帳の北条郷には、「北条之内○○村」とされる村々と広田村・長島村・南条村が一括されている。これは地形的な要因のほか、中世の支配状況等がある程度反映されている地域区分とも考えられる。広田村には一部椎谷藩領があるので、第1表は「北条之内○○村」とされる村のみを対象とした。また戸数は『白川風土記』を参考にした。当該地の石高は、17世紀後半で急増したが、その後は元禄年間に2050石、天保年間に2107石になったのみで変化はわずかである〔新潟県1981〕。したがって、『白川風土記』と天和検地帳との時間的な隔たりはある程度克服できるものと考えられる。

第1表の「町方」とは、検地帳で家近村をも含めて「北条町方」・「北条之内町方五ヶ村」とされる村である。「正保国繪図」には「北条村」と表記され、家近村も独立しているので、支配状況の変化もしくは何らかの相違があったと想定される。この町方五ヶ村を1村とすると、天和年間の北条は全体で11村となる。また、石高・戸数とも北条では群を抜いており、『白川風土記』に記載されている「北條ト呼家居ナク十一カ村ノ惣名ナリ町方村ヲ以テ中央トフレハ悉ク町方村ヲ主トシテ四方ノ道程何許リト云事ヲ記ス」に見合う内容である。また町方村を除くと、今熊・赤尾・下光安・深沢・十日町は石高が比較的高く、それに比例して戸数も多いと思われるが、赤尾・深沢以外は20戸前後と平均的である。石高と戸数の量比からみれば、赤尾・深沢は1戸あたりの石高が低いので、石高で表わせるもの以外の生産性が想定される。これについては、当該地が柏崎と魚沼とを結ぶルート上に位置していることも要因のひとつにあると思われる。なお、ここに報告する国光の二ツ塚は、深沢村に近接している。

註) 「正保国繪図」については、小松はか1994を参考とした。

III 調査の概要

1 調査の方法とグリッドの設定

本発掘調査の範囲は、市道22-18号線事業用地における実際に法面として掘削を受ける部分であった。調査用グリッドは、平成8年度に実施した音無瀬遺跡発掘調査に基づき、道路改良事業において20m毎に打たれた指標（センター軸）をもとに設定した（図版2）。この軸に沿って略南北方向へ10m毎に分割し、その呼称には北から1・2・3…の算用数字を用いた。また事業用地のセンター軸を中心として略東西方向へ10m毎に区分し、西からA・B・C…のアルファベットを用いた。これによって10m四方の大グリッドが設定され、「A-1グリッド」などと称することとした。したがって、調査の主要な対象とした塚の位置は、L-M-11-12グリッドとなる。この大グリッドを2m四方の小グリッドにより25分割し、遺物の取上げなどに利用することとした。小グリッドの呼称は北西を①、北東を⑤、南西を⑨、南東を⑩となるよう設定した。地形等による制限などから実際の調査区の範囲は図版2のとおりとなった。

調査は当該地の現況が山林であるため、本格的な調査に先行して樹木の伐採、および刈払い作業から始まった。それに引き続き、作業の安全を確保するための仮設足場と、昇降用の階段の設置がなされた。それらの作業が終了し、ようやく塚が築造された尾根の平坦部までの通路が確保され、本来の地形が観察されるようになった。その後、現表土の状況での地形測量を実施した（図版3）。発掘の手順としては、最初に2基の塚に主軸の方向を合わせた土層観察用の十字ベルトを設定した。ただし、それぞれ実際の主軸方向が異なるため、ベルトの交差する部分はそのまま延長した。この部分は2基の塚を直線的に見通した場合の土層観察を終えた後、第1号塚の主軸方向に合わせ改めて切り直すこととした。次に、このベルトに沿ったサブトレーンチを発掘し、地山土層と塚の盛土を検出した。その後、十字ベルトを残してその周囲の表土剥ぎを行った。塚周辺の地山土層上面が検出され、塚の盛土部分との境界線を確認した。そして、塚内部はサブトレーンチ内をさらに地山土層上面まで発掘し、盛土の土層観察を行った後、おおむね1層ずつ慎重に発掘していく。その後、さらに地山面まで発掘し、調査区全体の旧地形と塚内部の状況および基底部の形態を確認した。最後に、2基の塚の十字ベルトを東西ベルト、南北ベルトの順に除去して終了とした。なお、調査期間中は、立て続けに大型台風や豪雨に見舞われた。事前に災害対策を講じていたが、固定したコンバネ板が飛ばされるという被害があった。しかし、調査区が水捌けの良い丘陵部に立地していることから、幸い雨水による被害の心配はなかった。

2 発掘調査の経過

現場作業は平成10年9月24日から10月22日の調査終了まで、延18.5日間にわたって実施した。調査面積は約105m²、調査員・補助員延88.5人、作業員延62.5人であった。

前述のように、調査区が尾根上に位置すること、雑木が生茂っていることなどから、さまざまな準備が必要であった。調査期間としては9月を予定していたが、悪天候も災いしたために、これらの準備作業が終了したのは、9月中旬になってからであった。

9月24日、ようやく調査を開始することができた。表土剥ぎ以前の現況地形を記録するために、まず調査員のみで地形測量を行った。測量により2基の塚が方形を呈し、互いの主軸が異なることが明らかとなつた。このことから、2基の塚には、築造時期や目的の差異があること、あるいは主軸と異なる別の規則性があることなどが可能性として生じたので、以後このことを念頭に入れながら調査を進めていった。連日雨天の中での作業ではあったが、3日間をもって測量が終了した。並行して調査用のベルトとサブトレンチを設定したので、本格的な発掘作業が着手可能となった。

実際の発掘初日である9月30日には、発掘作業の全スタッフが集合し、文化振興課長の挨拶、諸連絡事項や調査工程の説明等がなされた。調査が塚を対象としたものであることも考慮し、参加者全員で現場作業の安全祈願を行った。その後直ちに調査区の表土剥ぎを開始した。最初に発掘したサブトレンチ内にて明黄褐色土上面を検出し、これを今回の調査の遺構確認面および地山面と認定した。調査区内には切株やそれに伴う根が無数に張り巡っており、木根の処理を行ながらの作業となった。切株は塚内部にまでその根が及んでいるものも存在した。これらは無理に抜根せず、周囲の盛土掘削に合わせて土を除去していく、地山面に大きく食い込んでいるようなものはそのままの状態にしておいた。また、掘削で生じた廃土や切株は一輪車で運搬し、断崖の傾斜を利用し廃土置場まで滑り落とすよう予め整備していた。このため、作業は思いのほかスムーズに進行することができた。10月5日、塚の東側に略方形の土坑(SX-3)が確認された。検出面から焼土や木炭粒が確認されたことから木炭窯跡であることがわかった。6日、サブトレンチから塚の盛土状況が確認された。塚盛土は旧表土と地山土との混合土であり、周囲の旧地形を復元した結果から、塚東側平坦地部分の旧表土以下を掘削し、その土砂を用いてそれぞれの塚を築造したことが確認された。さらに土層観察の結果、2基の塚には盛土となる旧表土と地山土との混合具合に差異が認められた。

12日、塚の十字ベルトを除く表土剥ぎが終了した。13日、午前中に地元北条南小学校の2年生児童が見学に訪れたので、簡単な遺跡の説明会を催した。児童らは思い思いの質問を投げかけ、初めてみる発掘現場を目の前にして様々な反応を示していた。十字ベルトの断面処理が終了し、写真撮影後、土層断面図作成を開始した。また、第1号塚掘削中に縄文時代の土器片と石錘が出土した。検出当初は、築造時の紛れ込みによるものと思われたが、分層作業後、盛土と地山の間に旧表土層(遺物包含層)の存在が確認された。その後も遺物包含層から縄文時代の遺物が若干量出土した。14日は、天候が不安定であるため、調査員のみで図面作成中心の作業を行った。SX-3は、十字ベルトを残し発掘を開始したが、予想に反して堀込みが深いものであり、底面を確認するには至らなかった。堅穴状の木炭窯であることが再確認され、内部から生焼けの木炭と焼土が多量に出土した。後日改めて発掘したが、深さが身の丈ほどもあり、ベルトを残しての掘削は非常に困難であった。15日は、第1・第2号塚のセクションが見通せるよう、第2号塚北側のベルトの切り直し作業を行った。その後のセクション図作成途中に雨足が強くなったため、作業を中止せざるを得なかった。

19日に引き続き20日は、最後に残された調査用ベルトの除去を行い、終了後、調査区全体を清掃し完掘写真撮影を行った。また、作業員を入れての調査最終日であるため、文化振興課長からの挨拶があった。21・22日は、調査員による測量中心の作業を行い、調査区全体の測量や後始末等が終了した後、現場作業は完了した。調査期間中は、便宜を図って下さった北条中学校や地元の方々の来跡があり、日程や場所の都合で実施できなかった現地説明会にかえることができた。

IV 遺跡と遺構

1 遺跡と調査区の概要

国光の二ツ塚は、柏崎市大字北条字国光地内に位置している。小字国光は、塚を含む西半部が大字北条、山側にあたる東半部が大字東条に属しており、2つの大字地内に跨がる小字名である。付近は大字界が入り組んでおり、近隣の小字にも同様な例がある。大字にかかわらず、塚の立地する尾根は、先端部から約700mの範囲が小字国光地内に含まれている。そこで、国光の二ツ塚が立地するこの尾根を「国光尾根」と便宜的に仮称し、以下の記載においてこの名称を用いることとする。

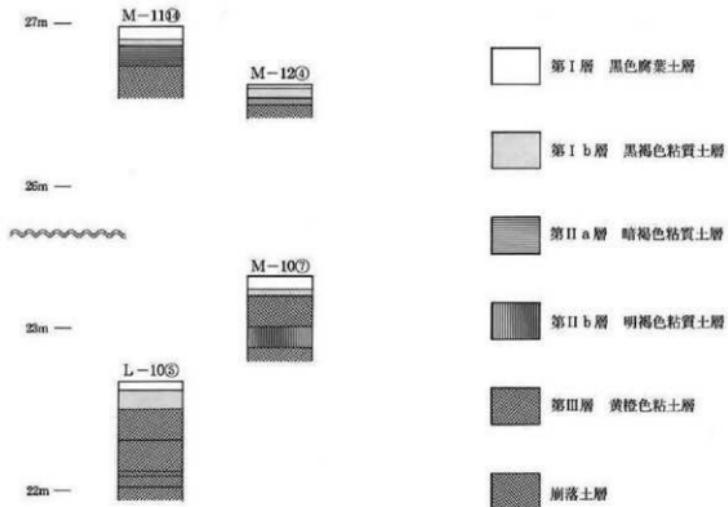
今回の発掘調査で対象となった調査区は、道路改良の法面として土取りされる部分で、国光尾根の先端部にあたる。主要な調査区となったのは尾根の上面で、検出された遺構としては、第1号塚・第2号塚およびS X - 3とした木炭窯がある。同じ事業用地内には、主要調査区の北東側にある中腹部にも狭い平坦面がある。この部分は、地滑り痕などが随所で認められるので、遺跡が存在する可能性は低いと思われる。トレッチにより試掘を実施したが、遺構・遺物ではなく、主要調査区内における遺物包含層に対応する層も検出されなかったため、この部分は遺跡範囲外と判断できた。したがって、全面的に発掘調査を実施したのは、尾根の上面のみとなった。

2 基本層序

今回の調査では、事業用地内の4地点において基本層序を確認した。うち2地点は塚が立地する尾根の上面（M-11③・M-12④グリッド）であり、ほかの2地点はその北東側中腹に位置する中段の平坦面（L-10⑤・M-10⑦グリッド）である。

観察の結果、把握できた基本層序は第I層～第III層に大きく分類される（第3図）。第I層は、現表土を構成する層である。このうち上層（第I a層）は、現況である雜木林の腐葉土層である。黒色を呈し、縮まりがない。下層（第I b層）は、黒灰褐色土層で、粘性・縮まりがややある。現況が雜木林であったため、特にこの第I層には大小の木根が多く張り巡っていた。第II層は、尾根上面では第II a層（黒褐色粘質土層）、中段の平坦面では第II b層（暗褐色粘質土層）に区分される。第II a層は、粘性・縮まりがあり、塚が築造される以前の表土層（旧表土層）と考えられる。縄文土器・石器をわずかに包含しており、塚の基底部においても確認された。第II b層は、第II a層よりも色調が明るく、遺物等は発見されなかつた。第III層は、黄橙色粘土層で、粘性・縮まりがある。今回の調査区における地山土層である。また、尾根上面の南側を中心として、径2～10mmの小礫が集中して多く混入している部分が認められる。

主要な調査区とした尾根上平坦面をめぐる周囲の斜面には、地滑りなどによって崩落した部分が随所に認められる。北東側の中腹部にあたるL-10⑤グリッドでは、第II層が確認されず、かつて地滑りのあった箇所と思われる。またM-10⑦グリッドでは、第II b層の上層に第II b層および第III層の混合土が約20cmほどの厚さで堆積していた。これは崩落土と考えられる。



第3図 国光の二ツ塚基本層序柱状模式図 (1 : 30)

3 塚の概要

本節では、発掘調査された塚の概要を述べる。2基の塚の各説の前に、まず塚の立地や現状について触れ、次に盛土・覆土の土層区分について説明しておきたい。

国光の二ツ塚の立地と現状 国光の二ツ塚が立地するのは、国光尾根の先端部である。この尾根は、八石山塊からおおむね西へと派生し、約2kmの延長を有する細長い尾根である。南は深沢川の侵食により、西北西から西南西へと開析する方向を変え、北は佐野入川により北西から南西へと変わる。したがって、国光尾根はこのような南北の沢によって挟まれているため、全体的には「へ」の字形を呈し、先端部はやや尖り、南西方向に向っている。また、国光尾根は先端部に至るまで急な斜面を両側に配しながら、沖積地へ向かって傾斜している。小字国光に含まれる先端部から約700mの範囲においては、尾根全体の傾斜は緩やかとなり、尾根上では比較的平坦な地形が作り出されている。尾根上で小字国光とされる範囲はこの平坦面にほぼ該当する。塚が立地するのは、この先細りした平坦面の先端、尾根筋よりもやや西側にそれた中腹部にあたる。平坦面の標高は26~27mで、直下の水田面との比高は約7mである。

しかし、現在では原地形を止めている部分は限られている。国光尾根の先端部分から約50mの地点では、深沢集落を通過する道路を造成するために、尾根が分断されている。また塚の北東側にあたる裾部には、19世紀初頭に築かれたと推定されている溜池がある〔片岡ほか1971〕。さらに、今回の調査原因である工事で改良される既存道路が造成された際にも、尾根の土取りがあったことが予想される。このような諸工

事によって、国光尾根の先端部は大きく削り出された部分が多いと思われ、塚は小さく瘦せた独立丘上に立地しているかのようにもみえる。尾根の所々には、地滑りなどによって崩落した部分が認められ、地山土が露呈している箇所が見受けられる。特に、今回の調査区においては崩落の痕跡が著しい。第1号塚は保存状態が比較的良好で、辛うじて9割ほどが遺存しているものの、第2号塚で崩落から免れたのはわずかに半分程度である。また、現況は山林であり、全体的に雑木が生茂っていた。雑木には大小があったが、塚部分に大きな根をはるものもあった。塚の築造に関わる場合もあるので、年輪を調べたが、近世以前に遡るものはない。

なお、事業用地およびその近辺で発見・調査された塚は、第1号塚と第2号塚の2基である。雑木を刈払った後で、第2号塚の南西部にもマウンド状の盛り上がりが確認された。高さは約40cmで、2基の塚のマウンドよりも規模は小さい。平坦部の西端部でもあり、ほとんど崩落していたために形態を把握することはできなかったが、塚である可能性も生じた。しかし発掘調査の結果、この部分には盛土層は確認されず、規模も考慮すれば、塚ではなく第2号塚の周溝の掘削によって比高が生じた部分と判断された。

盛土および覆土の層序区分 塚は2基とも盛土の流出や尾根の崩落などによって、築造された際の状況が維持されていない部分がある。もともとこれらの塚に備わっていた形態や方向性といった内容については、現況からだけではなく、断面から観察される盛土の状況や盛土発掘後の基底部の形態など多くの情報を提供している。また周溝覆土も2基存在する塚の新旧関係などを知る手掛りにもなりうる。したがって、各説の記載にあたってはまず塚の現況等について触れ、次に着目した事項である盛土・基底部・周溝について整理して述べることとした。

また、塚を構成する土層は、基底部をなす第IIa・III層と盛土層（第O層）である。第Ia層・第Ib層および周溝覆土を除去するとこれらは検出される。盛土層はおもに色調によって細かく分類することが可能であるが、全体的には第Oa～Od層の4層に大分類され、そこから塚の築造方法等を推測することができる。記載にあたってはこの大分類をもとにし、盛土層は第IIa・III層の混合土と考えられ、第Oa～Od層への分類は、第IIa・III層の混合度合を示すと思われる色調の違い等による。第Oa層は、第III層を主体とし、第IIa層の混合はあまりみられないため、暗黄褐色を呈している。第Ob層は、第III層に第IIa層が混じるもの、その度合は低く、全体的には明褐色である。第Oc層は、逆に第IIa層の度合が多い層で、（暗）褐色を呈している。第Od層は、第IIa層が主体であるため黒褐色である。

さらに周溝覆土については、各層の混同を避けるため、観察した土層断面の位置をA～Eとし、土層番号にこれを冠した。土層観察の位置は、A：第1号塚の北東側、B：第1号塚の南東側、C：第1・2号塚の間、D：第2号塚の南東側、E：第2号塚の南西側である。対応する層など、詳細については断面図（図版6・7）の註を参照されたい。

1) 第1号塚（図版3～6・16～20）

第1号塚は、L～M-11グリッドに跨り、頂部の平坦面はおおむねL-11⑩・M-11⑩に位置する。尾根の地滑りなどによって北部の一端が崩落てしまい、北西部の等高線も急になっている。また、塚の山側にあたる南東部分は、他に比べて等高線が緩やかであり、北西～南東方向に長方形を呈している。さらに北東～東部分では、塚の立ち上がる傾斜変換線が後述する基底部の主軸線よりも50°前後ずれており、不整形な部分になっている。これらのことは、かつて塚を構成していた盛土が一部流出してしまったことを示していると思われる。

しかし全体的にみれば、第1号塚の形態は方形であることをうかがうことができるのであり、遺存状態としてはむしろ良好といえる。発掘前の塚頂点は標高27.147mを計り、尾根上平坦面からは約0.6m、麓にあたる沖積面からは約8mの比高がある。塚頂部は略長方形を呈しており、およそ中央部に窪みが認められる。当初は、盛土に構築された土坑等の存在を想定していたが、土層観察によって木根等による擾乱に関係して生じたものと考えられた。

盛 土 第II a層上面からの盛土の厚さは最大約0.6mで、後述する基底部の削り出し深度から、塚の高さは約0.8mと推定される。断面はほぼ半円形を呈するが、塚頂部に窪みがあることや、すでに流出している部分があることなどから、東西方向の断面形は「M」字状に歪んでいる。しかし、土層毎にみられる色調の違いは明瞭であり、盛土は水平を意識して形成されたことをうかがうことができる。また盛土には土器・石器のほか、(小) 磨などは含まれず、土の精選があった可能性も否定できない。

本塚の基底部上面には、まず第III層の割合が大きい第O b層が盛られた。しかし、層厚は20cmにも満たず、その上位には第O a層、側部に再び第O b層が盛られる。次に、黒褐色を呈する第O d層が全体的に盛られた。この段階で本塚の上面はほぼ水平を呈するようになり、最後に暗褐色を呈する第O c層を被せている。周辺に流出したと思われる盛土(B 2層・A 1層)の色調は第O c層や第O d層に近似しているため、本塚の盛土はおおむねこのような構成であったと考えられる。

基 底 部 基底部は第II a層および第III層によって構成されている。基底部の検出にあたっては、第II a層上面において精査すべきであったが、第O a・O b層と第II a層との識別が困難であったため、第III層上面で基底部を観察することとした。

基底部は、第II a・III層を約0.2mほど削り出すことによって築造されている。基底部の北西辺はすでに崩落していること、南東辺は第III層の削り出しが曖昧であることなどから、立ち上がり部分の形態は明確ではないが、上端の形態からはおおむね方形であったことが看取できる。1辺は3.4~3.6mで、N-62°-Eを指向している。周辺地形との関係からいえば、等高線に平行していることが指摘できる(図版5)。ほかにピット等は確認されなかった。

周 溝 周溝の形態は一定ではなく、各部によって幅や深度が異なっている。東~南東辺をめぐる周溝は、掘り込まれた幅が約3.4m、深度約0.2mであり、溝というよりは基底部を削り出して塚を視覚的に高めるために周辺を掘削したものに近いと思われる。南西辺の周溝は第2号塚と共有されているが、土層観察からは新旧関係等は確認されなかった。掘り込まれた深度は約0.3mで、幅は約1mである。北東辺・北西辺では崩落によってその実態が明らかではない。山側から流れ込んだきめの細かい土砂、さらに塚からの出土物によって埋没していく。

2) 第2号塚(図版3~5・7・21~25)

第2号塚は、L~M-11~12に跨り、頂部の平坦面はL-11②・L-12⑤・M-11②・M-12①に位置する。すでに南西部の1/3ほどが欠失しており、盛土も太い木根を支えとして崩落から免れている部分さえあったため、基底部に至っては約半分が遺存しているのみであった。崩落部分である北西側および南西側の等高線が描く曲線は屈折しているが、これは基底部および盛土の下層がすでに崩落し、盛土の上層が辛うじて木根によって支えられているためである。本来の形態は方形であることがわかるものの、盛土の流出によって隅部は丸みを帯び、等高線や基底部の傾斜変換線は円形に近くになっている。また、塚頂部はおおむね平坦であることがわかるが、傾斜変換線の描く形態はやや不整形である。やはり盛土の流出

があったと思われ、かつての頂部平坦面は現存するものよりもやや広かったと予想される。

発掘前の塚頂点は標高27.100mで、第1号塚との標高差はわずか4.7cmであるが、直下の沖積面からの比高もやはり約8mである。北東側の平坦な地点との比高は約0.6mであるが、最も比高差を持つ南西側では、約1.4mを計る。塚の東～南側は、地形に沿って南西側へ傾斜しているが、この段階でも周溝の痕跡が明瞭にみられる。

盛 土 第II a層上面からの盛土の高さは約0.7mで、塚全体の高さは約0.85m、比高差が最大の部分では約1.5mである。平面規模に比して高さが低いため、断面の形態は横長の半楕円形を呈している。第2号塚の盛土には、全体的に色調におけるバラエティが少ない。これは、第1号塚と異なり、第O d層とした黒褐色土層がみられないことが大きな原因と思われる。また盛土は混合土であるが、客体となる土砂がブロック状に混入しているほか、全体的に小礫が混じるといった差異が認められる。

まず、第II a層の上位に第O c層を盛っている。次に全体的に第O b層を盛るが、側部は第O a層で補強することによって基底部のプランに沿った塚の形態を作り出している。そして最上部には、第II a層が多く混合する第O c層が再び被せられる。

基 底 部 基底部は、やはり崩落によって1/3～1/2が欠落している。しかし残存部は比較的良好な状態で検出され、本来の形態は方形もしくは長方形であると推定できる。南西部分には段を有しているが、第II a・III層が同様の堆積状況であるため、人為的なものではなく、地形的なものと考えられる。N-131°-Eを指向しており、南側の等高線の方向に近似している（図版5）。遺存する南東辺の長さは5.9mである。第1号塚と同様に、ピット等は確認されなかった。

周 溝 崩落部分があるため、北西辺は観察できなかった。また、塚の南側は急傾斜になっており、基底部の掘り込みは明瞭であったものの、相対する肩部は把握できなかった。しかし第II a層の掘削位置から考えると、幅2.2～4.0m、深度約0.4mであったと推測できる。前述のように、北東辺は第1号塚と共に共有している。なお、本塚より流出したと思われる覆土には、第1号塚の場合と異なり、小礫の混入が目立つことが特徴としてあげられる。

4 木炭窯の概要（図版8・26）

今回の調査区からは、木炭窯1基も検出されている。位置はM-11⑦～⑨に相当するが、調査区内では比較的平坦な地点であり、おおむね西へ約7°ほどの傾斜である。平面形はやや不整形であるが、もともとは隅丸方形を意図したものと思われる。ほぼ直線的に掘り込まれ、底面は平坦である。南側には煙道部が付属する。規模は1辺が1.3～1.4m、深度約1.1m、煙道部の延長約0.6m、深度約0.2mである。

窯壁・窯床は被熱によって硬化しているが、ガラス質までには至っていない。覆土は、窯壁・窯床となる層を除くと上・中・下層に大きく3分類できる。下層（第5層）は層厚が40～60cmであるが、木炭粒が充満している。木炭はこの部位にて作られたことがわかるが、生焼け状態のものがほとんどであった。中層（第4層）は粘性・締まりのない黒灰色の層で、煙道部分となる層である。上層（第1～3層）は、地山土層を主体とするが、多くの木炭粒が混じっていた。

本遺構からは、時期を特定できる遺物等は出土していない。しかし、窯から流出したと思われる木炭粒（D3層）が、第2号塚の出土物（D4層）の上位にあること、形態や覆土からは「伏焼法」による木炭の生産が考えられることなどから〔新潟県教委1977〕、近現代の所産とすることができる。

V 出土遺物

おもに塚の基底部をなす第IIa層（遺物包含層）から検出されている。縄文時代の遺物がほとんどであるが、出土量や立地から、連續的な生業活動が営まれていたとは考えにくい。

1 縄文時代の遺物（図版8・27）

土器片10点あまりと石器2点が出土している。土器は全て小破片であるため、全体の器形がうかがえる資料ではなく、文様が確認できる資料も希少である。石器はいずれも狩獵・採集具である。

土 器（1～6） 全点が深鉢形の資料である。1は、口縁部を含む破片資料である。口縁部上部が直線的に外傾しており、器形としては口縁部全体が緩やかに外反する深鉢を呈すると想定される。幅4mmの半円形工具により縦位方向に3列の刺突文が施される。口縁は施文部分を中心とした波状を呈すると思われる。外面には炭化物の付着が確認できる。胎土は精良であり、焼成は比較的良好である。色調は暗褐色を呈する。類例が確認できないため明確な時期は特定できないが、器形や施文区画の特徴からひとまず前期後半のものととらえたい。2～5は、胴部破片資料である。3にはやや弯曲した櫛搔沈線が斜方向に施され、前期後半に特徴的な斜線肋骨文等のモチーフが想定される。胎土と焼成は1に類似する。4にはRL単節縄文が斜方向に施されている。6は、底部付近の破片であり、資料下端に底部との輪積み痕が確認できる。胎土は径3mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調はぶい橙色を呈する。

石 器（7・8） 7は、安山岩製の打製石斧である。形態は分銅形を呈しおむね円刃・両刃である。横長削片を素材とし、素材時の特徴を大きくとどめている。素材作出時の既設打面が資料頭部側面にみられる。正面に大きく礫面を残し、裏面に主要剝離面を残す。素材の両側縁に粗雑な二次加工が施され、未発達な抉りを形成している。頭部はほぼ無整形のままである。打面付近が本来厚いため、厚みを除去するための二次加工が目立つ。裏面刃部付近は著しく摩耗しており、使用頻度の高さがうかがえる。長さ10.1cm、幅5.5cm、厚み1.7cm。8は、小型の礫石錐である。偏平錐の長軸方向に粗雑な剝離による縄掛け部が形成されている。長さ4.3cm、幅4.6cm、厚み1.4cm。輝石安山岩製。

2 その他の時代の遺物（図版8・27）

古代の須恵器と近代の陶磁器が1点ずつ出土している。

9は、須恵器大甕の胴部破片である。薄手で非常に緩やかに内彎することから胴部でも頸部に近い位置に相当すると推定される。外面には格子文のタタキ目、内面には平行線文の当て具痕がみられる。胎土は大粒の砂粒がわずかに含まれるものとの比較的精良である。焼成はやや甘く還元化も不十分であり、色調は内外面とも黄灰色を呈する。器厚は0.8～1.0cmである。10は、大徳利の底部破片である。外面に鐵釉による文字がみられ、残存部分から「屋」と推定される。このため、酒屋の貸徳利であると思われる。全面に透明釉が施され、内面には顕著なロクロ成形痕がみられる。底部の推定直径は13.0cmを計る。

VI 総括

1 長島川流域における塚（群）

新潟県でも中越地方は、数多くの塚（群）の存在が知られている地域である。特に、柏崎市北条地区を中心とした長島川流域では、塚（群）の分布調査には大きな成果があげられており、現在では約40件300基ほどが確認されている（第4図）。また、夏渡の百塚（2）、国光の塚群（30）、じょうきん塚（34）では実際に発掘調査が実施されており、築造方法の推定や性格付けがある程度可能になったといえよう〔柏崎市教委1983・1989ほか〕。国光の二ツ塚は、当該地における4例目の発掘調査となる。

塚（群）は、2基以上の塚で構成される群集塚と単独で存在する単独塚とに分類される〔品田1992〕。前述のように当該地は塚群が多く分布することが知られている地域であるのに対し、7～8kmほど西に位置する柏崎平野南部丘陵では、群集塚の分布は希薄であり、相対的に単独塚の割合が大きい。両者の違いとして、「山的な感覚で据えられる空間」の有無による差異と考えられているが〔品田1991〕、沖積地が狭く、その多くが八石山丘陵・曾地丘陵によって占められる当該地の地域的特色と評価できる。

群集塚の中で事例として多く、一般的なタイプは、列状に配列する塚群である。塚は道との関わりが大きく、道は尾根筋に沿っているのが通例であるため、尾根筋に平行して配列される群集塚が多く見受けられる。また、発掘調査された夏渡の百塚は、当該地では最も多くの基數を有する群集塚であり、信濃川水系と鯖石川水系との分水嶺頂部に位置している〔柏崎市教委1989〕。また第4図では群集塚と単独塚との区別を示してはいないが、付表では、単独塚（員数1）が10件ほどである。しかし、広田の塚群B（26）・同A（27）・愛宕山の塚群（33）・宮ノ入の塚（38）などに括される塚を個別にみると、複数の塚で群構成される地点とは距離や地形を隔てて単独で存在する塚がある。実際には、これらも単独塚とみなすことができる。また、単独塚も群集塚と同様に道との関わりや境界性が指摘されている〔品田1992〕。

なお、群集塚・単独塚にかかわらず、塚（群）は集落域に程近い眺望のきく地点に立地するパターンが指摘できる¹¹。特に、国光の二ツ塚付近は沖積地がその周辺に比べて広く開けているため、比較的広い範囲から塚を見つけることができる点が特徴的である。

2 国光の二ツ塚の検討

国光の二ツ塚を理解するためには、この塚が築かれた目的やその時期などを考察する必要がある。これまでに実施された市内の発掘調査事例からは、確実に塚（群）に伴うと考えられている遺物は出土しておらず¹²、塚には無遺物性というパターンが指摘されている〔品田1990ほか〕。国光の二ツ塚においても、塚に伴う土坑や柱穴等ではなく、有機物等にも注意を払ったが、盛土層中からは遺物は検出されなかった。したがって、国光の二ツ塚についても、周辺に分布する塚（群）で考えられるような無遺物性が該当すると考えられる。ここでは、国光の二ツ塚がどのような特徴を有しているのかを考察するため、立地などの観点から周辺の塚群について触れ、次に築造工程に関わる問題を検討してみたい。



No.	名 称	所在地	員数	No.	名 称	所在地	員数	No.	名 称	所在地	員数
1	朝の木岬の塚	東長島	1	14	オカラシバの塚群	西長島	8	27	広田の塚群A	大広田	1 5
2	夏波の白塚	東長島	6 4	15	アキンボウ塚	西長島	1	28	金山の塚	北条	3
3	津塚の塚群	吉井熊川	5	16	老ノ浦の塚	西長島	2	29	三輪の塚	北条	2
4	神の塚	東長島	1	17	浦ノ入の塚群	西長島	5	30	国光の塚群	北条	1 0
5	杉平ソデ山の塚群	東長島	5	18	向山の塚	西長島	1	31	国光の二ツ塚	北条	2
6	間ノ平の塚	東長島	2	19	八方口の塚群	山岡	1 6	32	大場山の塚	北条	3
7	蛇越塚群	東長島	1 0	20	大山の塚群	山岡	1 2	33	愛宕山の塚群	北条	2 3
8	星敷の塚	東長島	1	21	宮ノ下の塚群	山岡	1 4	34	じょうきん塚	南条	1
9	大角間の百塚	東長島	5 2	22	大山の塚群	小島	1 0	35	神ノ倉塚	北条	1
10	ヤケヤの塚群	西長島	3	23	イボ山の塚群	小島	1 1	36	今船の百塚	本条	1 7
11	袖ノ久保の塚	西長島	2	24	庚 塚	小島	3	37	七面塚	北条	5
12	青中岬の塚	西長島	1	25	虚空藏山の行塚	西長島	1	38	宮ノ入の塚	北条	3
13	高津塚	西長島	1	26	広田の塚群B	大広田	1 2	39	小坂の塚	本条	2

※ 図中の●は、塚(群)の位置を示しているが、員数とは無関係である。

第4図 長島川流域における塚(群)分布図

1) 国光尾根における塚群

国光の二ツ塚が立地する尾根は、本報告書では「国光尾根」と仮称してきた。国光尾根には、国光の二ツ塚のほかにも、1列に配列する国光の塚群が存在する。

国光の塚群 国光の塚群は、1982年に第9～11号塚を対象とした発掘調査が実施されており、立地についての微細な地形や塚の築造に関わる内容などが明らかとなった〔柏崎市教委1983〕。

国光の塚群は、尾根筋に沿って1列に配列する塚群で、位置する標高は30～50mを計る(第5・6図)。各塚の位置関係により、下方からI群(第2～7号塚)、II群(第8号塚)、III群(第9～11号塚)に分類される。発掘調査では、検出された基底部によって形態が方形であったことが確実となった。またその指向する方向は、尾根の軸線を正確に意識したもので、第10号塚と第11号塚はわずか3mほどの間隔しか持たないが、尾根軸線が傾いているために、塚の主軸線には24°の差異が認められている。

築造は、旧表土層・地山土層を削り出して基底部を設定することから始まる。盛土は、これらの削り出された土砂が用いられ、側面からの補強を除けば、それらはほぼ水平に積み重ねられている。発掘調査された第III群の塚群の基底部には、それぞれ旧表土層・地山土層が確認されたことから、同時にプランが設定されて築造されたことがわかる。ただし、第11号塚の盛土に旧表土の混入が多いという特徴から、第11号塚がまず築造され、次に第10号塚・第9号塚が続くと推定されている。

国光尾根における塚の配置 現段階で、国光尾根において確認されている塚(群)は国光の二ツ塚と国光の塚群の2件である。その位置を模式的に表すと第5図のようになる。塚群が位置する部分の尾根軸線は、おおむね北東～南西方向を指向している。国光尾根は、先端部が道の開削によって分断されているが、軸線の方向はこのまま維持されていると判断される。前述したように、国光の塚群は尾根の軸線に対する正確な配置が意識されており、わずかな軸線の傾きにも基底部の方向は対応していた。しかし、国光の二ツ塚はこの軸線からはやや地点を離れた尾根中腹の西側斜面に位置している。

近接したこの2件の塚群については、どのような関係があるのか不明な点が多い。塚群の配列方向からみると、両者はもともと1連の塚群ととらえられ、道の開削によって数基の塚がすでに消滅しているという仮説も成り立ちそうである。しかし、立地における相違点を尊重すれば、これらは各々別件の塚群とみなすのが妥当である。なお、後述する築造に関わる事項や無遺物性については互いに共通しているが、これは塚的一般的な様相であると理解することとしたい。

2) 国光の二ツ塚築造工程の推定

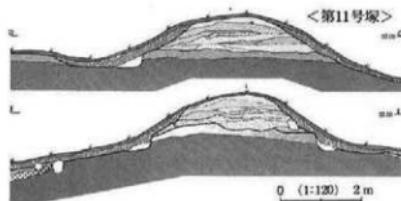
それでは、国光の二ツ塚はどのようにして築造されたのだろうか。現況測量や検出された基底部および層序などを材料として、築造工程を推定することとしたい。

基底部の設定と周溝 塚の築造は、まずプランの設定から始まる。2基の塚は、基底部の指向する方向が異なるため、築造時期にはある程度の時期差を有する可能性もある。しかし、2基の塚からは、第IIa層および第III層で構成される方形の基底部が検出されている。このことは、一方が先行して築造され、時期を離れて次の段階に他方が築造されたのではないということを示している。したがって、築造順序といった時間的な問題を除外すれば、2基の塚は同時に基底部が設定されて築造されたと考えられる。

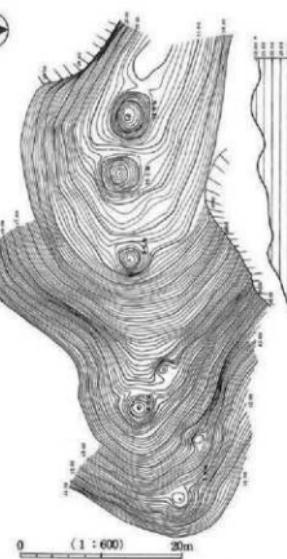
また、尾根軸線はほぼ北東～南西で、斜面の等高線もこれにはほぼ一致するが、第1号塚基底部の方向もほぼこれに沿っている。しかし、先端部に近い第2号塚周辺では、等高線は北西～南東方向へ転換してお



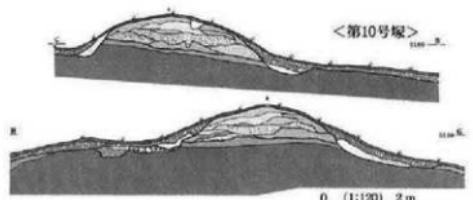
第5図 国光尾根における塚群の位置模式図



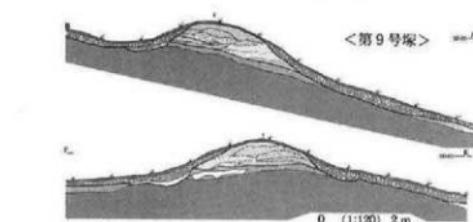
<第11号塚>



第6図 国光の塚群第7～11号塚全測図



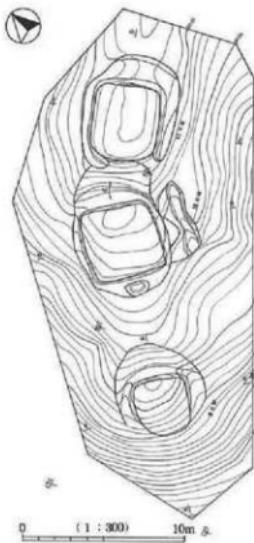
<第10号塚>



<第9号塚>



第8図 国光の塚群第9～11号塚断面図



第7図 国光の塚群第9～11号塚基底部平面図

り、塚基底部の方向もこれにほぼ合致している。したがって、基底部の指向する方向の差異については、国光尾根中腹の等高線に基づいているためと思われる。

基底部が確定すれば、削り出し作業と同時に周溝も造成される。第1号塚と第2号塚の間に位置する周溝の幅はわずか1m程度であるが、東側（斜面上方）については、幅3~4mに及んでいる。これは盛土としての土砂を獲得するため、大幅に掘削した結果と思われる。また、斜面上方の地面を掘削すれば、比高が生じて塚を視覚的に高くできるという利点も加味されていたのではないだろうか。

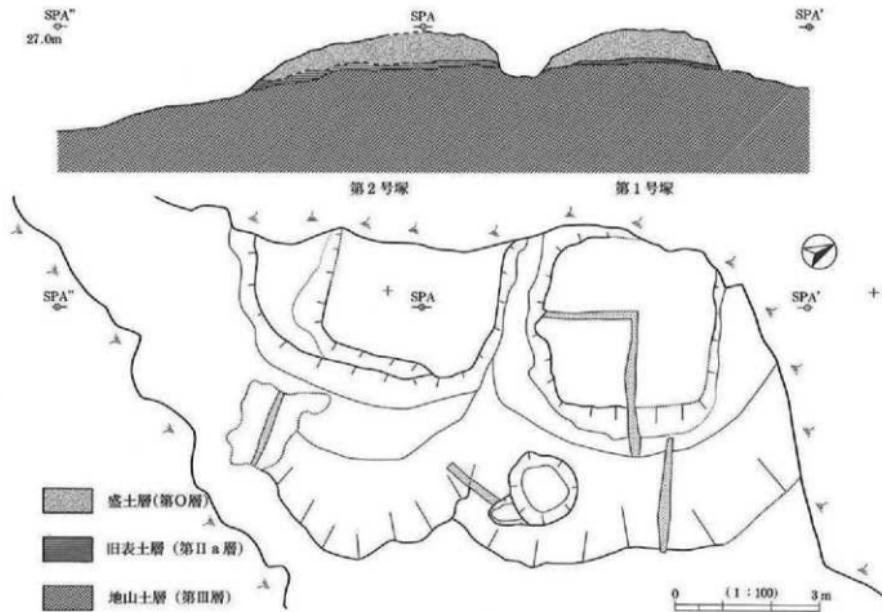
盛 土 2基の塚の基底部が設定されると、次の工程は盛土作業となる。2基の塚の築造順序については、盛土の観察によって推測することができる。第1号塚と第2号塚の盛土を比較した場合、最も異なる点としては、第2号塚に第IIa層を主体とした第O d層が盛られていないことである。このことは、国光の塚群第11号塚と第9・10号塚との違いと同じ理由があったと思われる。すなわち、第1号塚に対し、周辺より盛土としての土砂を採取した際には、上面にあった旧表土層（第IIa層）が用いられたのであり、第2号塚の盛土を採取する際には、すでに地山土層（第III層）が露呈しており、小礫が混入する第III層が盛土の主体になったと考えられる。第1号塚の盛土下部には、第III層が主体的な第O a・O b層が盛られているので、まず基底部を削り出した際の土砂が用いられ、次に上位に対して第IIa層を主体とする土砂（第O c・O d層）が積まれたと考えられる。第2号塚では、旧表土に段差が生じており、微妙な色調の差異から北側上段より盛っていたことが推測される。側面からの補強もあるが、土砂の盛り方はやはり水平が意識される。また、上部を暗色系の土砂（第O c層）で覆うのは2基で共通している。

工程の終了 第8図は、2基の塚に対して直線的な見通しによる断面を表したものである。現表土層（第I層）や周溝覆土は除外し、盛土および基底部のみを対象とした。盛土の流出や木根等による表面の変形などはあるが、おむね築造段階の形態を把握することができるのではないだろうか。2基の塚は形態や規模に違いはあるが、標高差はわずかに5cmほどであり、互いに高さを揃えるという意識があったと思われる。盛土後の仕上げ作業として整形などをすれば、このことにも注意が払われた可能性もある。

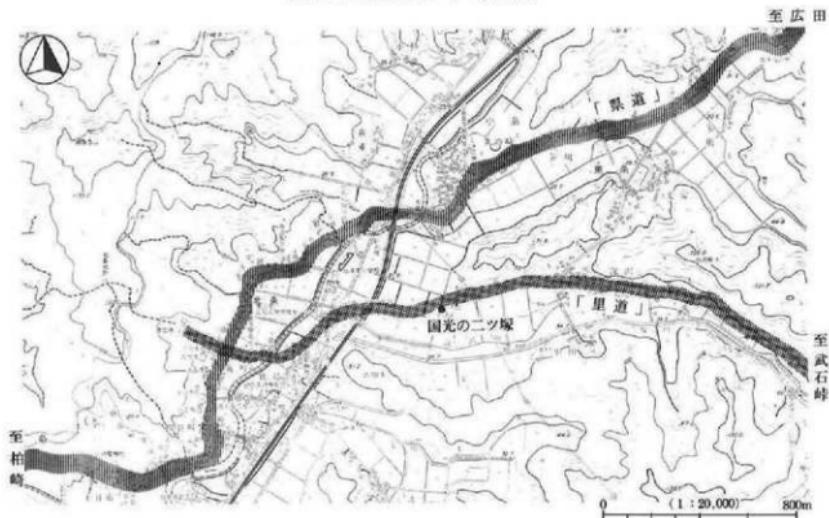
また、国光の塚群第10号塚〔柏崎市教委1983〕・藤橋向山の塚〔同1986〕・夏渡の百塚第12号塚と第13号塚の中間〔同1989〕には、性格は不明だがピットが検出されている。このピットには塚築造に伴って構築された可能性もある。今回も基底部が検出された段階で精査を試みたが、結果的には何も得られなかつた。しかし、すでに崩落した西側部分については不明とせざるを得ない。なお、第1号塚のちょうど中央には大きな木根痕が確認された。藤橋向山の塚では、意識的に植えられたとされるクマスギがあり、塚の存在を強調しているが〔柏崎市教委1986〕、第1号塚にもこのような可能性もあるといえよう。

3 まとめにかえて

塚（群）の持つ特徴として、三叉路や分水嶺に立地するという境界性を帯びていることが指摘されている〔品田1992ほか〕。国光の二ツ塚について考えれば、国光尾根の先端部700mほどは小字国光であるが、尾根の北西側は小字仙道町、先端部の東側の沖積地は小字音無瀬となっており、塚の位置は3小字の境界に近いといえる。しかし、国光の二ツ塚の役割とは単に小字界を示すものだけなのであろうか。狭い沖積地しか持たない長島川流域の中で、当該地は比較的広い沖積地が形成されており、北条の中心部（近世の町方村）からの眺望もきく。最後に、これらから想定される国光の二ツ塚の役割について推定し、まとめにかえることとしたい。



第9図 国光の二ツ塚 平・断面略図



第10図 国光の二ツ塚と主要な旧道の位置図

第9図は、明治44年に測図された地図³³⁾をもとにして、「県道」や「里道」と分類されている2本の旧道を示したものである。したがって、現在の一般道路のルートとは部分的な差異が認められる。近世の北条は、魚沼街道の宿場とされており、柏崎から小千谷方面へは小島・影沢・広田と北西に向かう街道が利用されていた〔小松ほか1994〕。この街道のルートとしては、おおむねこの「県道」が該当すると思われる⁴⁴⁾。このほか、近世の北条一小千谷ルートとしては、武石峠を通過する街道があった。険しい道であったにもかかわらず、越後縦や海産物、あるいはその商人たちの往来が盛んで、17世紀後半には年貢米の輸送路として利用されたこともあるなど、主要な街道であった。詳細なルートは不明であるが、第9図にみられる、北条集落から東へ向かう「里道」が、この街道に該当すると考えられる。

塚の立地は、道との関わりが指摘されていることをすでに触れた。国光の二ツ塚は、この街道に非常に近接した位置にあることがわかる。明治44年の地図には「県道」・「里道」のほかに「小径」も記載されているが、国光の二ツ塚に最も近接しているのはこの「里道」（街道）である。塚が尾根の先端部に立地していることから、この街道沿いにおける沖積地と丘陵地の境界、あるいは深沢村（近世）の出入口であることを示していた可能性があろう。また開けた沖積地からの眺望がきくことからも、北条の中心部や魚沼街道からも望むことが可能である（図版11）。単独塚には「標」という機能があったことも指摘されているが〔品田1992〕、国光の二ツ塚にもそのような機能が備えられていたのではないだろうか。

塚と道との位置関係から推定を試みたが、現段階ではこれらを実証する術を見出すことはできない。しかし、国光の二ツ塚の持つ可能性のひとつを指摘することができたのではないかと思われる。北条で生活した人々、あるいは北条へ訪れた人々の必要に応じて国光の二ツ塚は築造されたことがうかがえる。また、塚は中世後期～近世前期の所産と考えられながらも、具体的な築造時期や、機能していた期間も明らかにすることはできなかった。関連資料の増加に期待することとし、今後の課題としたい。

註 1) 神ノ脊塚（35）は、集落極からだいぶ離れた山間部に位置している。過去に何らかの遺物が出土したことが伝えられているため、塚はでなく、経緯といった別の性格が想定される。

2) 半田の塚群第3号塚からは、基底部下土中に銅錢と錢貨が出土しているが〔中村1985〕、この土坑は塚との共通性が低く、塚よりも先づると考えられている〔品田1990・水澤1996〕。

3) 大日本帝国地圖測量部発行「深野山」（1912年）を参考した。

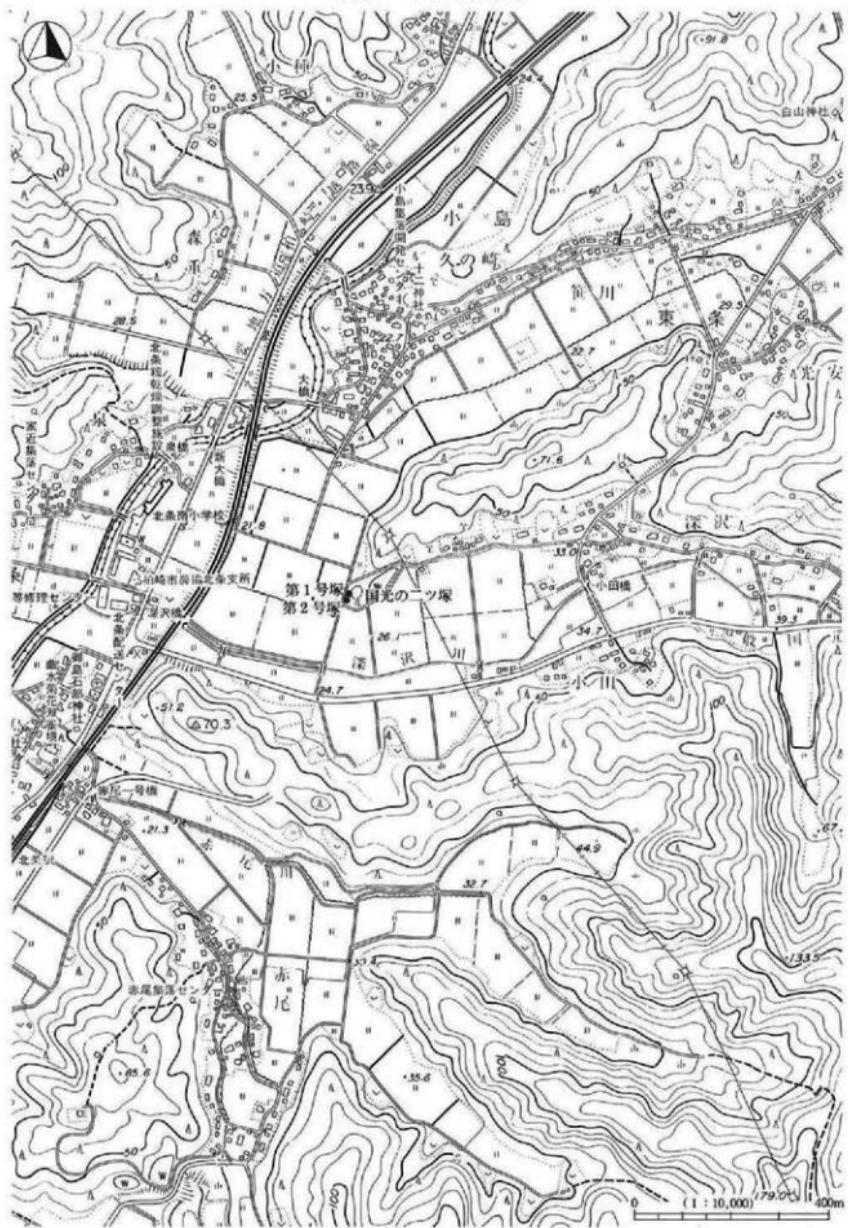
4) 明治の「県道」は広田からもさらに北西へ向かうが、魚沼街道は東へと進路を変え、深野山側（越路町）へと至る。

◆引用・参考文献

- 宇佐美勝美・坂井秀吉 1987 「魚の登陸跡」『考古資料（国・拓木・説明）』（柏崎市史資料集考古編1） 柏崎市史編さん室
宇佐美勝美・高橋 1987 「五分一通路」『考古資料（国・拓木・説明）』（柏崎市史資料集考古編1） 柏崎市史編さん室
宇佐美勝美・田中 1987 「浦八道跡」『考古資料（国・拓木・説明）』（柏崎市史資料集考古編1） 柏崎市史編さん室
宇佐美勝美・山本 1987 「引地A道跡」『考古資料（国・拓木・説明）』（柏崎市史資料集考古編1） 柏崎市史編さん室
萩野正博 1986 「福島の城跡群」（新潟県史）通説篇第3章
柏崎市教育委員会 1983 「國の城跡群」（柏崎市歴史文化財調査報告書第3）
柏崎市教育委員会 1986 「福島山城の城跡」（柏崎市歴史文化財調査報告書第6）
柏崎市教育委員会 1989 「夏波の城跡」（柏崎市歴史文化財調査報告書第9）
柏崎市史編さん・委員会編 1984a 「福島の近世史料（支配・施政）」（柏崎市史資料集近世篇1上） 柏崎市史編さん室
柏崎市史編さん・委員会編 1984b 「福島の近世史料（天和と寛永）」（柏崎市史資料集近世篇1下） 柏崎市史編さん室
柏崎市史編さん・委員会編 1987 「福島の古代・中世史料」（柏崎市史資料集古代・中世編） 柏崎市史編さん室
柏崎市立図書館編 1977 広瀬 典 原著「白川郷と伊勢」（越後守国羽林郡之部） 柏崎市立図書館資料刊行会
片岡正雄・荒川 男・鶴川光江 1971 「江戸時代の北条」『北条町史』 北条町史編纂委員会
金子佑男 1990 「交通と通路」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん室
小松 聰・山田裕二 1994 「魚沼街道」『魚沼街歴史』 魚沼山街道・入舟街道（新潟県歴史の通調査報告書第六集） 新潟県教育委員会
七轩町遺跡等発掘調査会 1978 「歴史文化財調査報告書」 七轩町遺跡・本村金塚
高田高志 1987 「猪子遺跡」『考古資料（国・拓木・説明）』（柏崎市史資料集考古編1） 柏崎市史編さん室
高田高志 1988 「柏崎市夏度・谷地遺跡の歴文土器」『新潟考古学談話会会報』第2号 新潟考古学談話会
高田高志 1990 「柏崎市域における塚（群）研究の歩み—現在の視点からみた塚群調査事例の検討—」『柏崎市立博物館報』No.5 柏崎市立博物館
高田高志 1991 「福島の城跡とその認定—柏崎市域における単独塚の検討—」『柏崎の民俗』第4号 柏崎民俗の会
高田高志 1992 「新潟県における塚（群）研究の現状と課題—考古学・民俗学から社会史的理義に向けて—」『新潟考古学談話会会報』第10号 新潟考古学談話会
新潟県立歴史博物館 1970 「柏崎城跡」上巻 柏崎市
村田 第 1987 「羅食武士」『新潟県史』通史編第1中世 新潟県
中村孝三郎 1985 「柏崎市半田赤坂塚群調査報告書」 柏崎市教育委員会
新潟県 1981 「新潟県史」資料編6 五糸上越
新潟県教育委員会 1977 「佐伯高見丸大通車」 深堀文化財調査報告書・片田遺跡（新潟県埋蔵文化財調査報告書第9）
村山教二 1990 「中世における柏崎市」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん室
水澤幸二 1996 「中世越後の延喜」『坂詰秀一先生還暉記念 考古学の謡謡』 坂詰秀一先生還暉記念会
木沢 康 1990 「大宝二年の越中国郡分割をめぐって」『信濃』第32卷第6号 信濃史学会

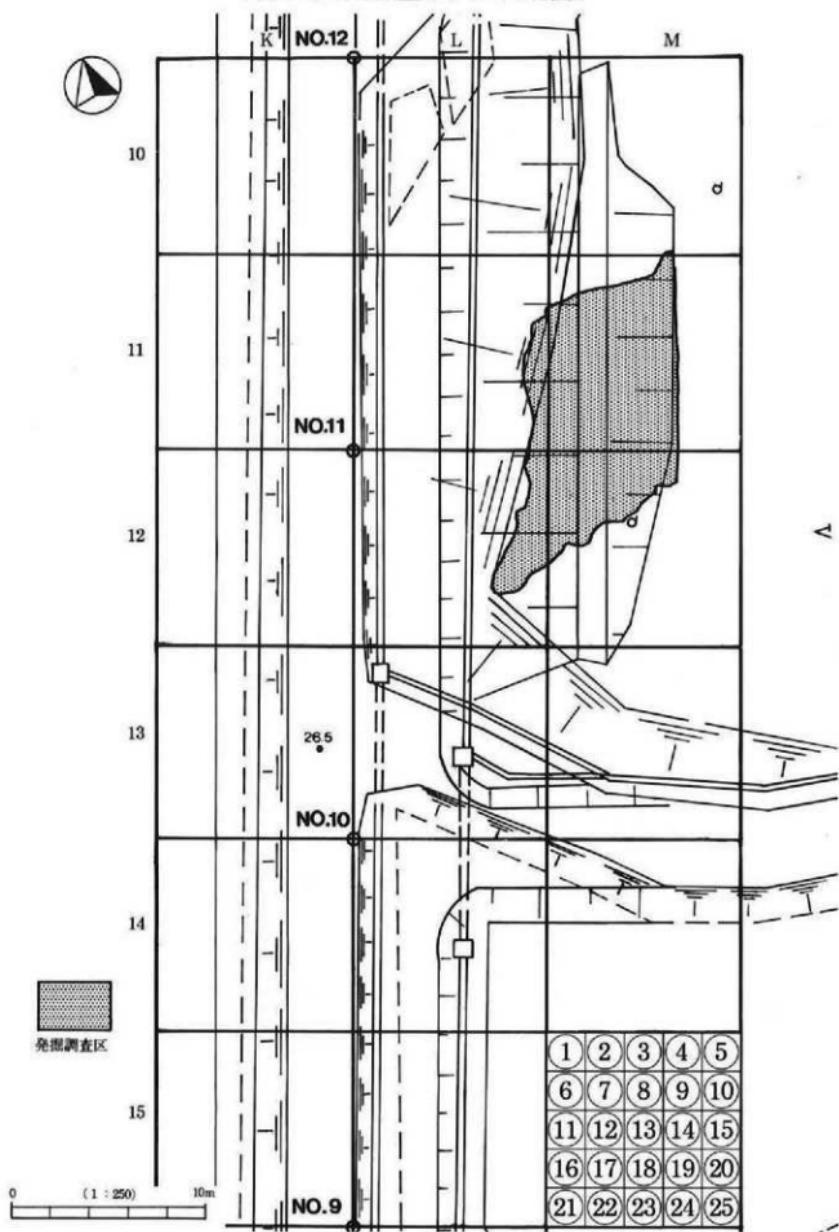
圖版 1

国光の二ツ塚と周辺地形

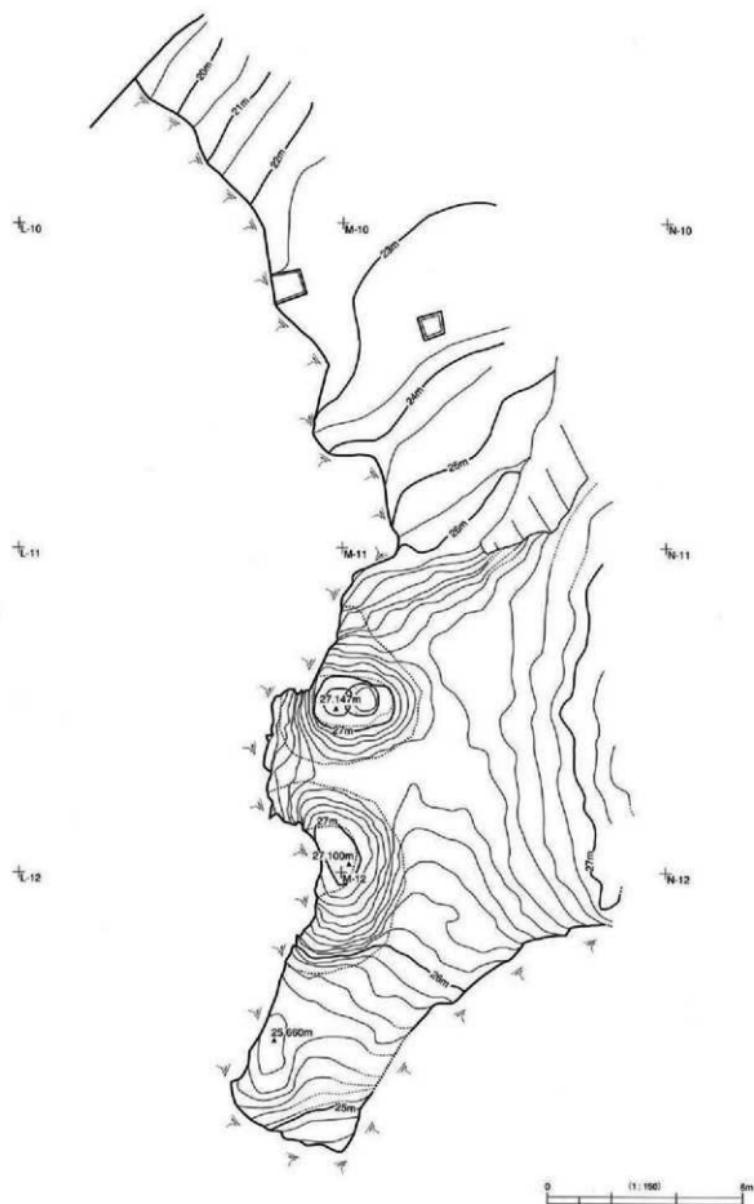


図版2

国光の二ツ塚発掘調査区とグリッドの配置図

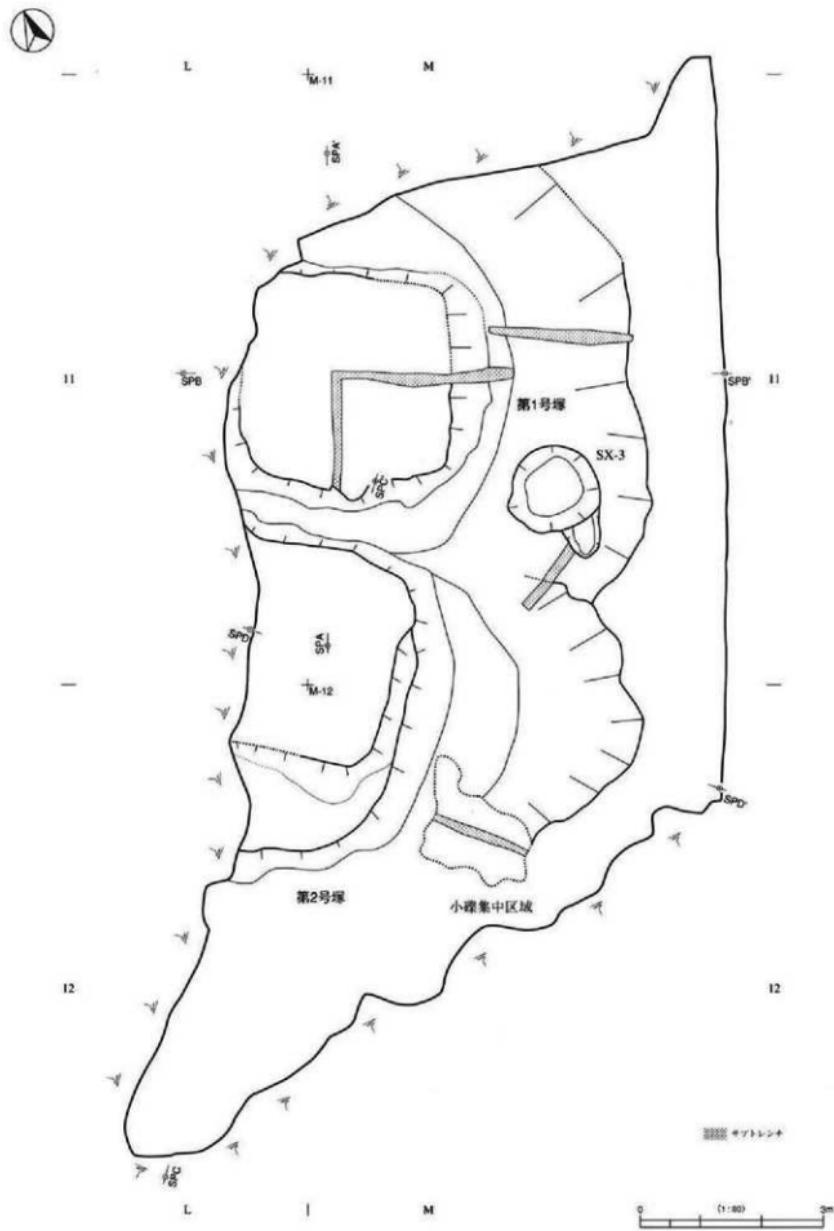


国光の二ツ塚全測図



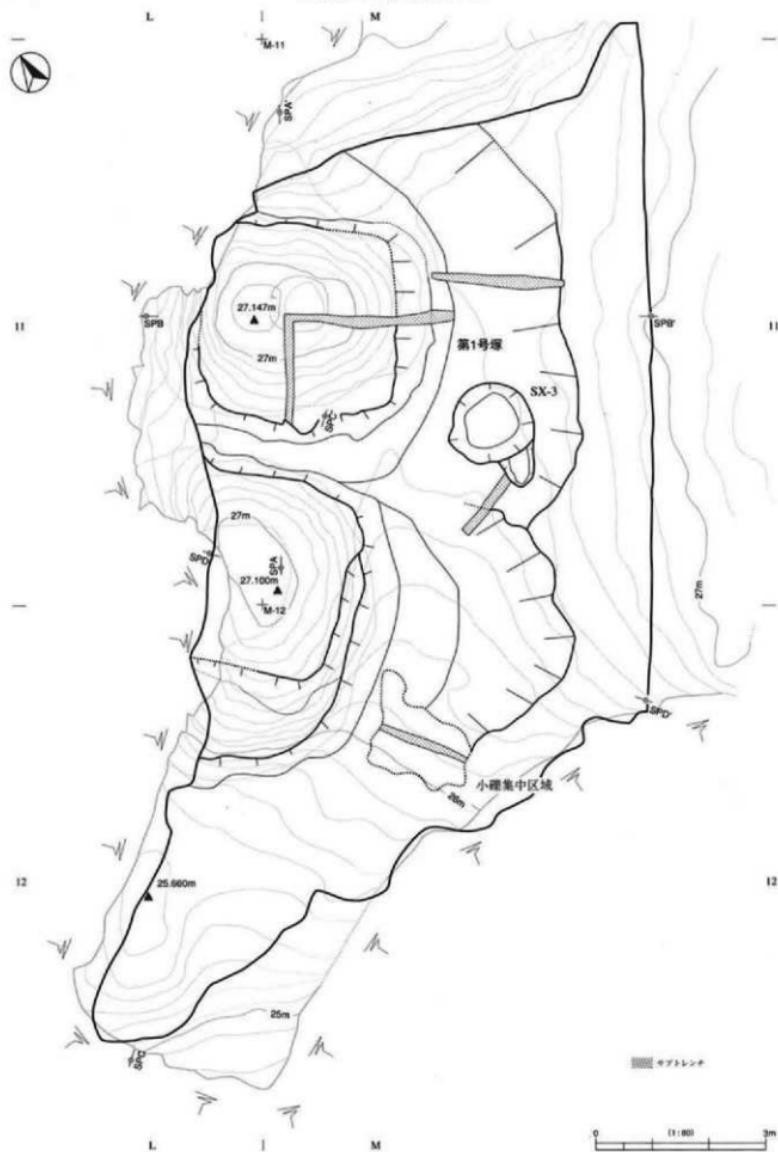
图版 4

国光の二ツ塚遺構全体図



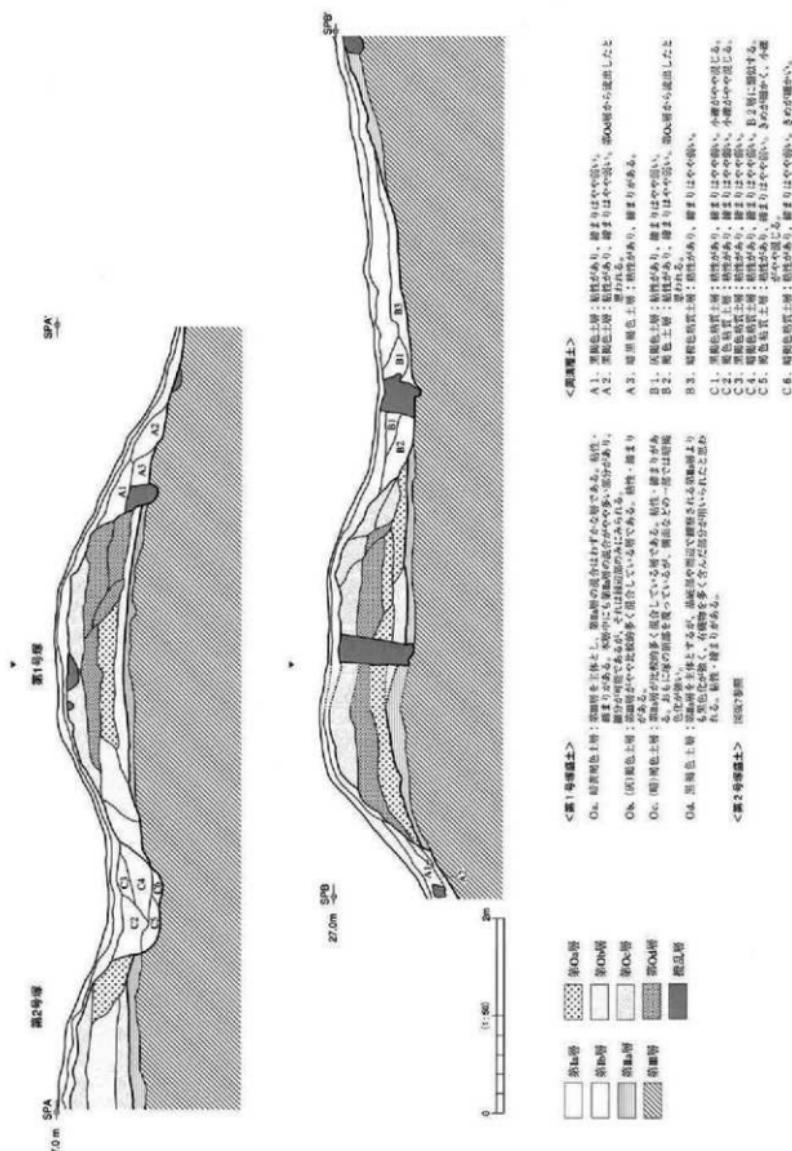
図版 5

国光の二ツ塚基底部と盛土

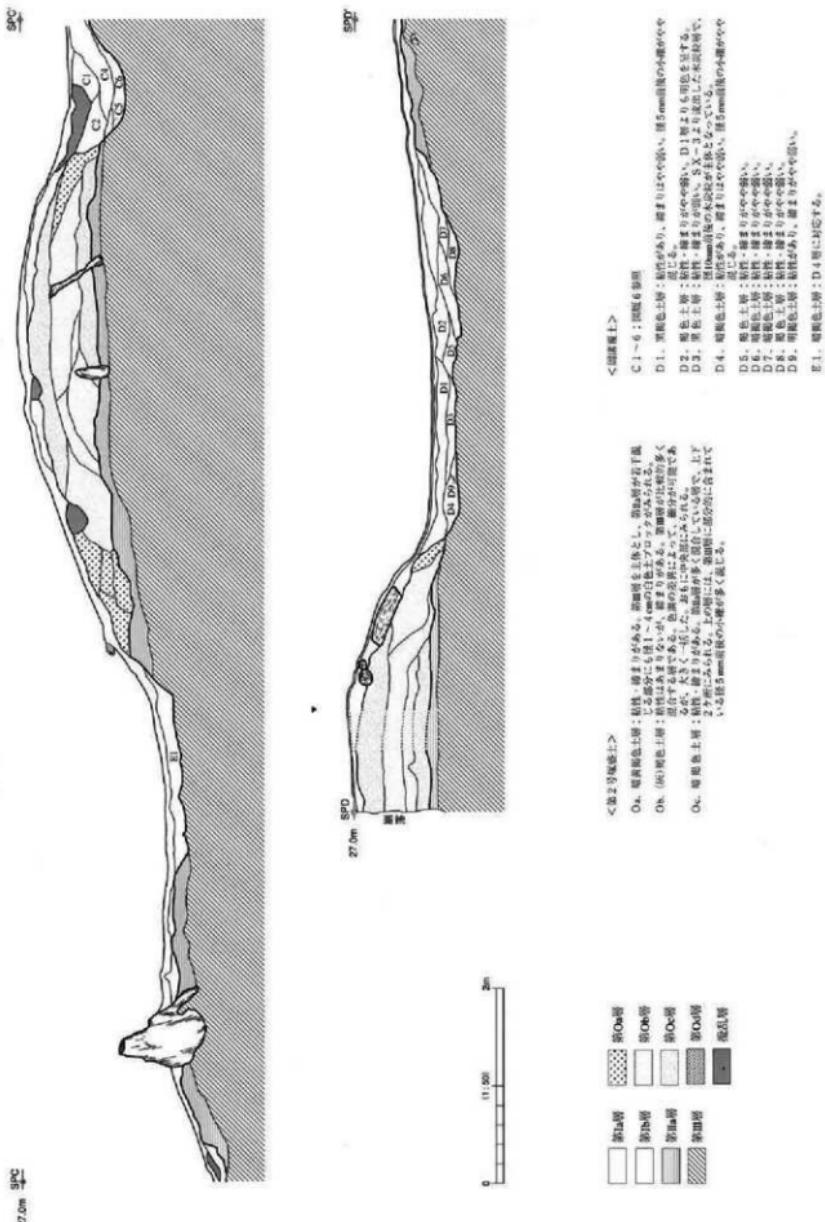


图版 6

国光の二ツ塚第1号塚断面図

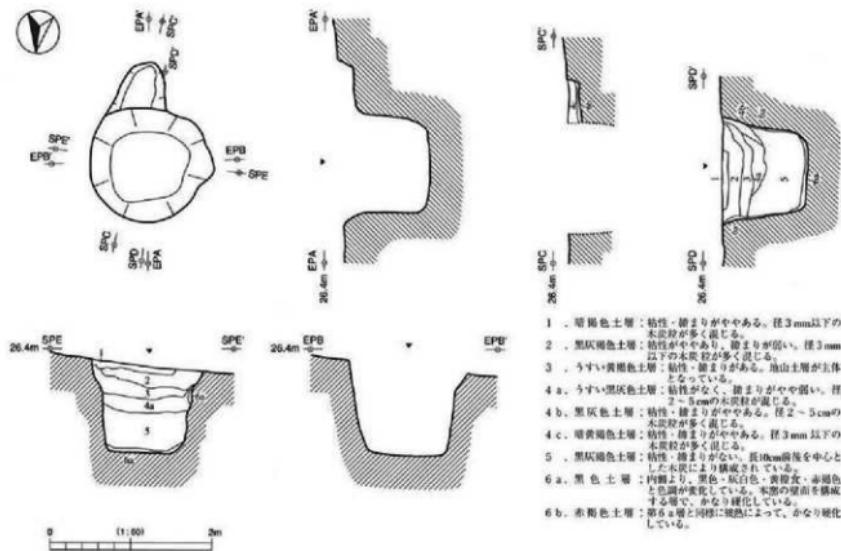


国光のニツ塚第2号塚断面図

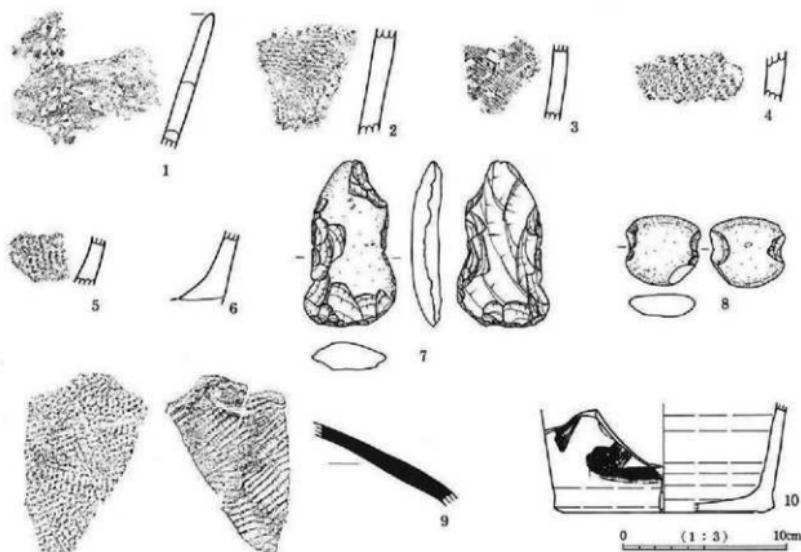


図版8

国光の二ツ塚S X - 3・国光の二ツ塚出土遺物実測図



1. 塗褐色土層：粘性・練まりがややある。径3mm以下の木炭粒が多く混じる。
2. 黒灰褐色土層：粘性・練まりが弱い。径3mm以下の木炭粒が多く混じる。
3. うすい黄褐色土層：粘性・練まりがある。埴山土層が主体となっている。
- 4.a. うすい黒灰色土層：粘性・練まりがやや弱い。径2~5cmの木炭粒が多く混じる。
- 4.b. 黒灰色土層：粘性・練まりがややある。径2~5cmの木炭粒が多く混じる。
- 4.c. 暗黃褐色土層：粘性・練まりがややある。径3mm以下の木炭粒多く混じる。
5. 黑灰褐色土層：粘性・練まりがある。長さ10cm前後を中心とした木炭により構成されている。
- 6.a. 黒色土層：内側より、黒色・灰白色・黄褐色・赤褐色と色調が変化している。木炭の界面を構成する部で、かなり硬分化している。
- 6.b. 赤褐色土層：第6a層と同様に焼熱によって、かなり硬分化している。



遺 跡 1



国光の二ツ塚周辺の航空写真（1961年）

約1:15,000

遺 跡 2



a. 遺跡遠景

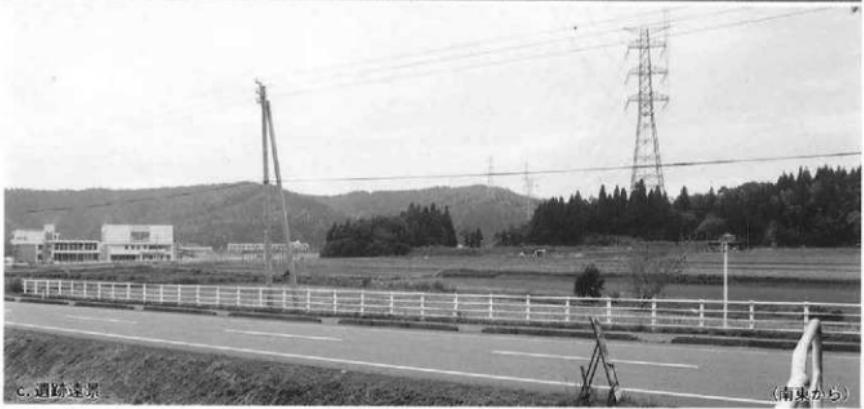
(南南東 八石山頂から)



b. 遺跡遠景

(南西から)

遺跡3



遺 跡 4



a. 遺跡近景

(南西から)



b. 塚発見状況

(東から)

調査1



調査2



a. 遺構確認

(東から)



b. 遺構確認

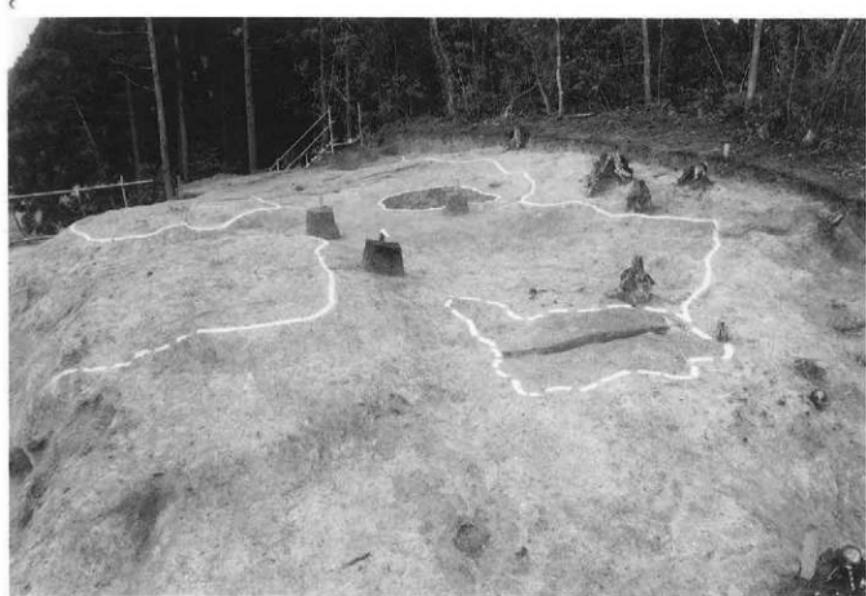
(南西から)

調査 3



a. 遺構完掘

(北東から)



b. 遺構完掘

(南西から)

第1号塚1



a. 発掘着手前 (発見状況)

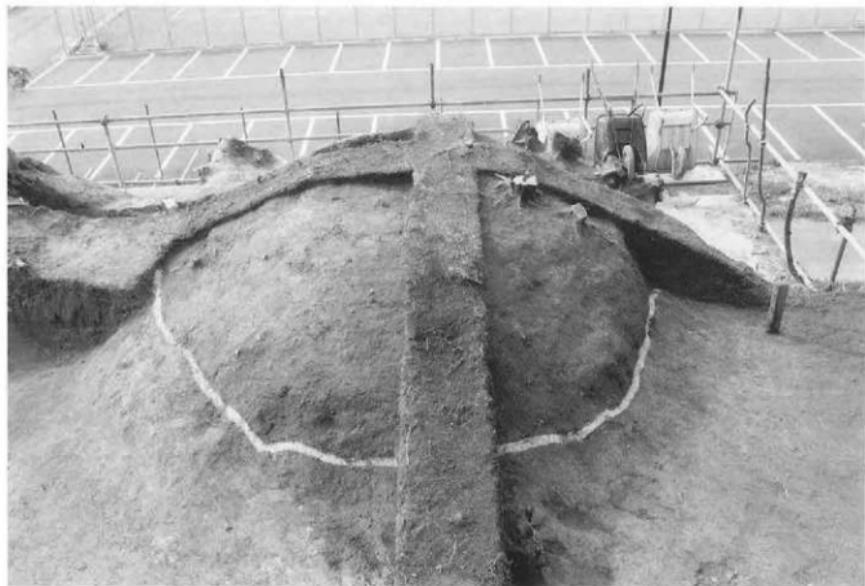
(東から)



b. 発掘着手前 (雑木刈払後)

(南から)

第1号塚2



a. 盛土状況

(南東から)



b. 盛土状況

(南から)

第1号塚3



a. 南北土層断面

(南東から)



b. 東西土層断面

(南西から)

第1号塚4



a. 土層と基底部

(南から)



b. 西・南ベルト

(南西から)



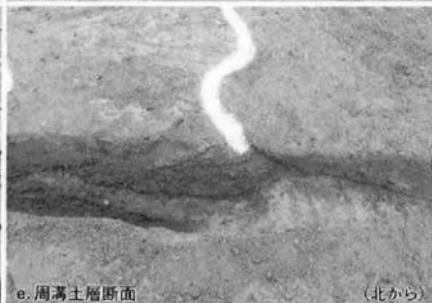
c. 東ベルト

(南西から)



d. 北ベルト

(東から)



e. 周溝土層断面

(北から)

第1号塚5



a. 基底部

(南東から)



b. 基底部

(南から)

第2号塚1



a. 発掘着手前（発見状況）

(東から)



b. 発掘着手前（雑木刈払後）

(南から)

第2号塚2



a. 盛土状況

(南東から)



b. 盛土状況

(東から)

第2号塚3



a. 南北土層断面

(南東から)



b. 東西土層断面

(南西から)

第2号塚4



a. 土層と基底部

(南から)



b. 南ベルト

(東から)



c. 東ベルト

(南から)



d. 周溝土層断面

(南東から)



e. 周溝土層断面

(南東から)

第2号塚5



a. 基底部

(南東から)



b. 基底部

(東から)

その他の遺構と基本層序

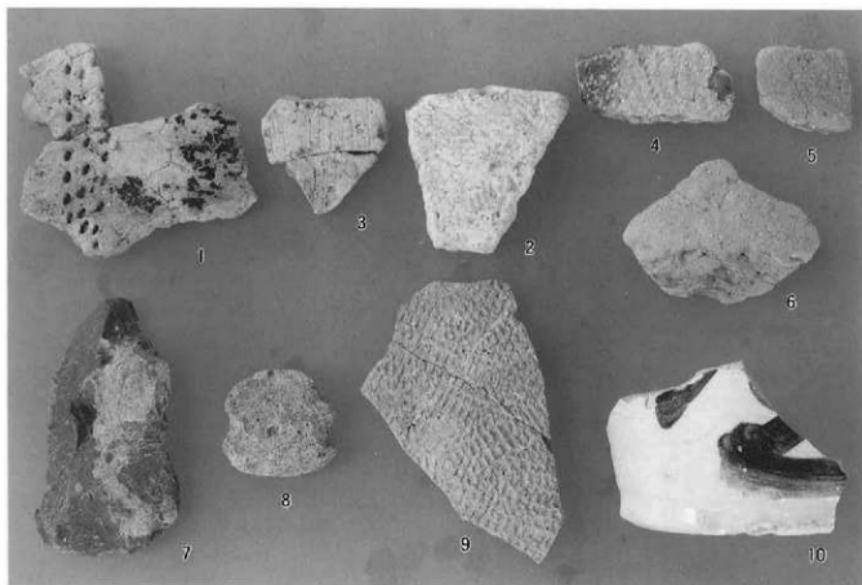
a. SX-3 南北土層断面図(1)
(西から)b. SX-3 南北土層断面図(2)
(南西から)c. SX-3 東西土層断面
(南から)d. SX-3 完掘
(西から)e. 小礫集中区域
(南西から)f. L-10⑤グリッド層序
(南西から)g. M-10②グリッド層序
(北東から)h. M-11③グリッド層序
(西北から)

眺望・遺物



a. 国光より米山を望む

(東から)



b. 出土遺物

約1:2

調査スタッフ



a. 調査区と作業風景

(南西から)



b. 調査スタッフ

報告書抄録

ふりがな	くにみつのふたづか							
書名	国光の二ツ塚							
調査名	新潟県柏崎市・国光の二ツ塚発掘調査報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	伊藤啓雄・平吹 純							
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	番 945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 T E L. 0257-23-5111 内線365							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東經 ***	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	15205	683・684	37度 38分 45秒	138度 38分 92秒	19980924～ 19981022	105	道路改良工事に 伴う発掘調査
国光の二ツ塚 第1号・第2号	新潟県柏崎市 北条							
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
国光の二ツ塚	塚	中世～近世	塚・木炭窯	縄文土器・石器				

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第30集

国光の二ツ塚

—新潟県柏崎市・国光の二ツ塚発掘調査報告書—

平成11年3月31日 印刷

平成11年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 株式会社 柏崎インサツ